

---

# 遊戯王GX 奇跡の軌跡

セバス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX 奇跡の軌跡

### 【Nコード】

N7325Y

### 【作者名】

セバス

### 【あらすじ】

普通の日常を過ごしていた高校生の少年と少女が、遊戯王の世界を救う為に原作を堪能しながら未知の敵と戦う物語。

ご都合主義どんとこいな作品です。苦手な方はご注意を。

## これが運命の出会いというやつか

「完全に遅刻じゃねえか！ 早く出て来いよ、由梨！」

「ごめん、お待たせ！」

「よし、忘れ物は無いな？ 走るぞ！」

「うん！」

俺は赤崎響弥<sup>あかさき きょうや</sup>。一昨日に高校三年生になった。

そして今日から普通授業っていう日に、遅刻する時間にも関わらず、俺は自分の家の近くを全力疾走していた。

「まったく、お前に買ってやった目覚まし時計、前ので何個目なんだったけな？」

「うう、ごめんね響弥。寝起きは力の加減が出来なくてさ……」

原因は俺の後ろを走っている、鹿野川由梨<sup>かのかわ ゆうり</sup>である。しっかり者だが馬鹿力で寝起きがメチャクチャ悪い、赤い瞳と肩の辺りまで伸びた白髪がトレードマーク。俺の幼馴染みだ。

今日も、寝ぼけて目覚まし時計を思いっきり叩いて粉碎してしまった所為で寝過ぎた、という普通の人ならまず起きることは無い事件で寝過ぎした強者である。

「あとちよつとだな。まだ走れるか？」

「うん！……あっ、ちょっと待って！」

学校まであと少しといった所で、由梨が何かを見つけたのか、急に足を止めた。俺もつられて立ち止まった。

「おい、どうしたんだ？」

「あっちから声が聞こえたんだ。行ってみようよ！」

「あっ、待てよ！」

由梨が走っていった後を俺もついて行く。

由梨は何か気になることがあると、他のことが見えなくなる癖がある。それをサポートするのが、小さい頃からの俺の役目だった。

「ここだったと思うんだけど……」

「特に何も無いな」

俺達がたどり着いた場所には、声が聞こえてきそうな物はなかった。由梨はがつくりと肩を落としている。

「あれ、気のせいだったのかな？確かに聞こえたんだけど……」

「ははは。まあ仕方ないな。そんなに頻繁に変わったことがあったら身が持たないし」

「うーん……」

「さてっと。もう完璧に遅刻だし、のんびり学校に向かうでしょう……ん？」

「どうかしたの？」

誰かの捨てたカードか。全く、知らないカードなんて無いんだぞ？カードが可哀相じゃねえか。

「《サイ・ガール》か。こいつだって使えるのにな」

「あ、サイ・ガールだ。可愛いな」

『ぷはあ！やっとして来られましたよ』

「「！？」」

待て待て！カードからなんか出たぞ！なに？オカルト？オカルトなのか？

『むうっ、失礼な。私はサイ・ガール。カードの精霊ですよ！』

「カードの精霊？アニメなら見たことはあるが……。それを信じろと？」

『信じて貰えないかもしれませんが、話だけは聞いて貰いたいんです。駄目でしょうか？』

ふーん、どうするかね？もう遅刻は確定だしな。聞くだけならタダだろうし、別にいいよな。

「いいぞ。話は聞いてやる」

『本当ですか？ありがとうございます！』

サイ・ガールの話を書き簡潔にまとめる。

遊戯王の世界のパラレルワールドに、歴史を破壊する謎の集団が現れたらしい。

パラレルワールドの世界の歴史が変わると原作の世界にも影響があるから、原作を知るこの世界の住人にも力を貸して欲しい、とのこと。

因みに、俺達イレギュラーが介入することに関しては、特に支障は無いらしい。パラレルワールドなだけあって、多少の無茶は利くそうだ。世界を破壊されては終わりのらしいのだが。

「どうでしょう？ お力を貸して貰えませんか？」

正直、サイ・ガールの話を書き二割程も理解できていない。誰だって漫画のようなことを現実で言われたら、信じられないだろう。

でも、こんな状況に憧れなかった、と言うと嘘になる。俺も由梨も、遊戯王はDM時代からずっと見ていたし、勿論OCGもやっている。プロの決闘者になれたら、なんて話もよくやってた。

願ってもないチャンスだ。アニメの世界に行った、なんて言っても誰も信じないだろう。だが変わり映えしない高校生活よりは、退屈しないで済みそう。由梨も同じ考えみたいだな。

「いいぞ、引き受けてやる」

『ほ、本当ですか！？』

「ああ。そんなこと聞かされたら、黙ってられないからな」

「私達にできることがあれば、なんでも言っ。できるかぎり力になるよ」

『あ、ありがとうございますっ！』

「なっ!？」

その目に涙を浮かべながら、サイ・ガールが俺に抱きついてきた。しかも、実体化しながら。

「よかったあ……よかったですう……」

「ち、ちょっと！　なんで響弥に抱きついてるの!？　響弥もなんで抱き止めてるの!？　そ、そこは私が……」

美雪が顔を真っ赤にしながら抗議してくる。後半は小声になって、何を言っているのか聞き取れなかったが。

そんなこともありつつ、俺達はイリカ（サイ・ガールにこう呼べと言われた）から詳しい話を聞いた。因みにイリカは精霊状態に戻っている。

「なるほど。俺達が行くのはGXの世界で、むこうの世界は基本原作準拠、と」

『はい。そしてもう一つ。向こうではどんなことが起こるか分かりません。なので、響弥さんと由梨さんにはボーナスが出ます』

「ボーナス？　もしかして、お金？」

イリカの言葉に首を傾げる由梨。金は金で貰えれば嬉しいけどな。  
『違いますよ。特別な力を一人につき二つまで授けることが出来るんです。』

「特別な力？」

『具体的にいえば、『幻想殺し』や『一方通行』みたいな能力です。自分で好きな能力を作ること可能ですよ』

由梨に見せられていた二次創作とかでよくある、転生特典みたいなものか。

何故例えのチョイスが無能力者と超能力者の能力からなのかは疑問だが。

まあ、能力についてはゆっくりと考えればいいよな。まだ時間はあるだろうし。

「で、俺達はGXの世界のどこのいつに行くんだ？」

俺は気になったことをイリカに聞いた。原作が始まる何年も前に飛ばされたら困るしな。

『そういえば言ってませんでしたね。場所は海馬ランドの近くの一軒家。時間は入学試験の筆記の一週間前です』

筆記試験の一週間前か。一週間あればなんとかかなりそうだな。「ち、ちよっと待って！　それじゃ私達、同じ家に寝泊まりするの！



「？」

『へ？ まあ……そうなりますね。でも何年も一緒に住む訳じゃありませんし、別にいいじゃ無いですか』

「き、響弥と、同じ家で……つまりつまり、これって……」

顔を真っ赤にしながら悶える由梨。何を言っているのかはやはり分からない。

由梨が復活するまで待つこと数分。

由梨はまだ顔が赤いものの、話ができるくらいには復活した。

『さて、これで説明は以上です。何か他に質問はありますか？』

「いや、特に無い」

「私も無いよ」

『それではそろそろ行きましょうか。せーのっ！』

そう言っ杖を振ると、持っていた杖から光が放たれた。

「え、ちょっ」

俺はそこまで言って、意識が遠くなった。

## **自分の魂は大切にすべし（前書き）**

第2話です。デュエルアカデミアでの実技試験です。

## 自分の魂は大切にすべし

俺達がGXの世界に来てから1ヶ月が経過した。

筆記試験は一週間の勉強でどうにかあったりした。結果は俺が二位。由梨是一位のBという順位だった。由梨に負けたのは悔しいが、目標だった十位以内には入れたし、とりあえず満足だ。

因みに、この世界に来てからイリカから新しいことをいろいろと聞いた。

驚いたのは、この世界には既にサイキック族やシンクロ、エクシーズなどの概念が存在したことだ。なんでもペガサスが数年に電撃発表したということらしい。

とは言っても、まだ一部のプロ決闘者にしか普及はしていないらしい。テレビで見た試合で《フレムベル・ウルキサス》を出した瞬間は、観客が祭りのような盛り上がりだったな。「響弥、そろそろ行こうよ。早くしないと遅れちゃうよ」

「もうそんな時間か。よし、行くか！」

すでに家の前に居る由梨の催促を受け、俺は荷物を確認して家を出る。

ここで負けちゃ意味がない。気を引き締めていかなければならぬ。

俺達が会場に入るときには、もう実技試験は始まっていた。

今はまだ百番台のデュエルか。かなり時間はあるな。

適当に席を見つけて座る。由梨も隣に座っている。

暇だ。

それから暫く他の受験生のデュエルを見ていたのだが、六十人以上もデュエルを見ていると流石に飽きる。俺はデュエルは見るよりやる方が好きだし。

由梨は隣で爆睡してるし、話は出来そうに無いな。暇つぶしに小説でも読むとするか。

『受験番号二番、赤崎響弥君。試験を始めます。四番のフィールドに来て下さい』

小説を読み始めて二時間。ようやく俺の番号が呼ばれた。

デュエルディスクにセットしたデッキを確認する。

元の世界から愛用し続けているデッキ。俺が一番信頼しているデッキが、確かにデュエルディスクにセットされている。根拠は無いが、負ける気がしないな。

「んじゃ。行ってくるぞ、由梨」

「ふえっ!? え、えっとお……頑張ってる?」

「何故疑問系だ。二番が呼ばれたんだ。一番も準備しておけよ」

「う、うん。ありがとう」

由梨を起こしてからフィールドへと向かう。べ、別に由梨が寝過ぎすんじゃないかって心配だった訳じゃないんだからね!

「君が赤崎君だね。デュエルの勝敗が合否を決める訳じゃ無い。気

を楽にしてかかって来てくれ」

そう言ってデュエルディスクを構えるリーゼントにサングラス、  
所謂モブ教師。

「分かりました。全力でいきますよ」

俺もデュエルディスクを構える。実はデュエルディスクを使うデュエルに慣れている訳では無いので、デュエルディスクでのデュエルに少し緊張している。

「いくぞ！」

「はい！」

「「デュエル！」」

響弥

LP／4000

手札／5

試験官

LP／4000

手札／5

「私の先攻だ。ドロー！」

あ、迷い無く先攻取りに行った。受験生に先攻を譲る、なんて考

えないのかな？

「私は、《アクア・マドル》を守備表示で召喚！」

アクア・マドル

星4／水属性／魔法使い族／攻1200／守2000

アクア・マドルか。個人的には小さな頃から好きなモンスターだな、理由は特に無かったけど。

「カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

試験官

LP／4000

手札／3

「俺のターン、ドロー！」

よし、どうにか出来る手札ではある。出し惜しみは無しだな。

「俺は《サイコ・ウォールド》を召喚！」

サイコ・ウォールド

星4／地属性／サイキック族／攻1900／守1500

「むう、サイキック族か。珍しいデッキを使うんだな」

「珍しい、ですか。まあ、周りには使っている人は居ませんでしたね」

俺の出したモンスターを見て驚く試験官。

確かに珍しいとは思う。元の世界にはサイキック族で統一したデッキをした奴はそうそう見なかった。こっちに來てからはライフコストが重いという理由でさらに敬遠されがちな種族になった。

だが、俺は自分の魂を曲げる氣は無い。こいつらと共に戦っていく。

「さらに俺は速攻魔法《緊急テレポート》を発動！ デッキまたは手札から、レベル3以下のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する。デッキから《サイコ・コマンダー》を特殊召喚！」

サイコ・コマンダー

星3／地属性／サイキック族／攻1400／守800

「さて、バトルです。サイコ・ワールドでアクア・マドールを攻撃します！」

「なに！？ こちらの方が守備力は高いのだぞ！」

あれ、サイコ・コマンダーの効果は知らないのか？ 教師なんだから、押さえておこうぜ？

「ダメージステップに、サイコ・コマンダーの効果を発動。サイキック族モンスターがバトルを行うダメージステップに一度だけ、100の倍数のライフポイントを支払うことで、エンドフェイズまで戦闘を行う相手モンスター1体の攻撃力・守備力を支払った数値分ダウンさせる。俺はライフを200ポイント払い、アクア・マドールの攻守を200ポイントダウンさせる。サイコ・ショックダウン！」

響弥

LP／4000↓3800

アクア・マドール

DEF／2000↓1800

「くっ、アクア・マドールの守備力が、サイコ・ウォールドの攻撃力を下回った。ライフを払って効果を使う。なるほど、面白い効果だな」

「まあ、これがサイキック族の特徴ですよ」

かなりの数のサイキック族が持つ、ライフポイントを払って効果を発動する効果。これがこの世界で敬遠される理由だ。初期ライフポイントが4000しか無いこの世界では、元の世界と同じ数値のライフコストを払ってもその重さが違う。そのコストの重さとシンクロモンスターの普及率の低さから、この世界ではクレボンスやサイコ・コマンダーといった有能なチューナーまで“使えないカード”と呼ばれている。払ったライフを回復する手段を確保するくらいならモンスターを入れて殴る。それがこの世界、ビートダウン至上主義者がかなりの割合を占める世界の特徴だ。

まあ、俺はさっきも地の文で言った通りサイキックデッキは潰さない。違うデッキを使う時もあるだろうが、俺の魂はこのデッキと共に有るからな。

「続けて、サイコ・コマンダーでダイレクトアタック！」

「ぐあああ！」

試験官



LP 4000↓2600

伏せカードの発動は無し、か。戦闘で使うカードでは無いのか？

「メインフェイズ2に移行します。先生、シンクロ召喚は知ってますよね？」

「ん？ ああ。チューナーモンスターと、チューナー以外のモンスターを素材として墓地に送り、そのモンスターのレベルの合計と、同じレベルを持つシンクロモンスターを融合デッキから特殊召喚する召喚方法のことだろう。それがどうかしたのか？」

「ええ。それを今からやろうと思ひまして」

俺が放った言葉に、試験官のみならず観客も騒然としている。

「サイコ・コマンダーはチューナーなんですよ。つまり、条件は満たしています。いきますよ、レベル4のサイコ・ワールドに、レベル3のサイコ・コマンダーをチューニング！」

サイコ・コマンダーが飛び上がり、3つの緑色の輪へと変わる。その輪の中にサイコ・ワールドが飛び込み、そのレベルである4つの星になった。

「生み出されし超常の力を持つ者よ。眠りし仲間の思いを、我が身体に還元せよ！  
シンクロ召喚！

誕生せよ、《サイコ・ヘルストランサー》！」

サイコ・ヘルストランサー

星7／地属性／岩石族／攻2400／守2000

サイコ・ヘルストランサーを召喚した瞬間、会場が静まり返った。そして、次の瞬間には割れんばかりの歓声に包まれた。

「こ、これがシンクロ召喚か。間近で見るのは初めてだ。こんなに興奮するデュエルは久しぶりだよ」

試験官も驚いたあとに、俺に言葉をかけてきた。

「お気に召したようでなによりですよ。ではデュエルの続きです。サイコ・ヘルストランサーの効果発動。1ターンに1度、墓地のサイキック族モンスター1体をゲームから除外して、自分のライフを1200ポイント回復する。サイコ・コマンダーを除外し、ライフを回復します」

響弥

LP 3800↓5000

よし、このターンに出来ることはこれくらいかな。問題は次の相手ターンだけど、手札にはどうにか出来るカードがある。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドです」

響弥

LP 5000

手札 2

「私のターン、ドロー！」

試験官がドローしたカードを見てニヤリと笑った。良いカードを引いたのか？

「リバースカード《強欲な壺》。デッキからカードを2枚ドローする！」

強欲キター！ コレクションのカードの中を探したけど、強欲な壺も天使の施しも無かったんだよなあ、ちくしょう。てか何故強欲を伏せた。ブラフにしては勿体無いな。

「《岩石の巨兵》を守備表示で召喚。そして魔法カード《二重召喚デュアル・サモン》を発動する」

岩石の巨兵

星3／地属性／岩石族／攻1300／守2000

二重召喚か。デュアルを組んでた時にはよく使ったな。作った頃は、血の代償が手に入らなかったのさ！

「君なら説明は要らないだろう。私は岩石の巨兵を生け贄に、《千年の盾》を守備表示で召喚！」

千年の盾

星5／地属性／戦士族／攻0／守3000

千年の盾……。

なるほど、試験官のデッキはバニラの守備モンスターを並べるデッキか。

「さらに、<sup>ツーマンセルバトル</sup>永続魔法を発動！ 各プレイヤーは自分のエンドフェイズに1度だけ、レベル4の通常モンスター1体を手札から特殊召喚できる。魔法カード《死者蘇生》を発動！ 墓地の《岩石の巨兵》を守備表示で特殊召喚！」

「私はこれでターンエンド。エンドフェイズにツーマンセルバトルの効果で、手札から《バトルフットボーラー》を守備表示で特殊召喚する」

バトルフットボーラー

星4／炎属性／機械族／攻1000／守2000

試験官

LP／2600

手札／0

はてさて、あの戦士族にはどうやっても見えない盾をどう攻略するかな。もうこのデュエルでシンクロはする気は無いし、デッキの中だけでどうにかするしか無い。

「俺のターン、ドロー」

来たか。これで見えたぜ、勝ちへの道が！

「魔法カード《最古式念導》を発動！ 自分フィールドにサイキック族モンスターが表側表示で存在するとき、フィールド上のカード1枚を破壊し、1000ポイントのダメージを受ける！ 俺は、千年の盾を選択！」

「くっ、自分へのダメージと引き換えに……！」

響弥

LP／5000↓4000

「魔法カード《死者蘇生》を発動！ 墓地からサイコ・ウォールドを復活させる！ そして、サイコ・ウォールドの効果発動！ 80ポイントライフを払うことで自分フィールドサイキック族モンスター1体の2回攻撃を可能にする！ ただしこの効果を発動するターン、このモンスターは攻撃できない。ライフを800払い、サイコ・ヘルストランサーの2回攻撃を可能にする」

響弥

LP／4000↓3200

「さらに、サイコ・ウォールドを生け贄に捧げ、《マックス・テレポーター》を召喚！」

マックス・テレポーター

星6／光属性／サイキック族／攻2100／守1200

「マックス・テレポーターの効果発動！ ライフを2000ポイント払うことで、デッキからレベル3のサイキック族モンスター2体を特殊召喚する！ 現れる、チューナーモンスター《メンタルシーカー》、《メンタルプロテクター》！」

響弥

LP／3200↓1200

メンタルシーカー

星3／地属性／サイキック族／攻800／守600

メンタルプロテクター

星3／光属性／サイキック族／攻0／守2200

「チューナー……まさか！」

「そう、そのまさかですよ！ レベル3のメンタルプロテクターに、レベル3のメンタルシーカーをチューニング！」

超常なる力を持つ悪魔よ、敵の手の内をその魔眼に映し、己が力へ換えよ！ シンクロ召喚！ 現れる、《サイコ・デビル》！」

サイコ・デビル

星6／風属性／サイキック族／攻2400／守1800

本日2回目のシンクロ召喚。さっきよりも観客が騒がしくなったな。試験官も啞然としてるし。でもまあ、止まる気は無いけど。

「まだいきますよ。サイコ・ヘルストランサーの効果発動！ サイコ・ウォールドを除外し、ライフを1200ポイント回復する！」

響弥

LP／1200↓2400

「さらに、永続トラップ《ブレイン・ハザード》を発動！ 自分の除外されているサイキック族モンスター1体を選択し、自分フィールドに特殊召喚する！ 来い、サイコ・ウォールド！」

3回目の登場、サイコ・ウォールドさん。どこか疲れてるように見えるのは気の所為か？

「なるほど、その為にサイコ・ヘルストランサーの効果でサイコ・ウォールドを除外したのか」

「そのとおりです。そしてサイコ・ウォールドの効果発動！ ライフを800ポイント払い、サイコ・デビルに2回攻撃を可能にする！」

響弥

LP／2400↓1600

「さあ、いきますよ。バトルフェイズに移行します。ヘルストランサーで、岩石の巨兵とバトルフットボラーを攻撃！ サイコ・ツイスト・ショック！」

「甘いぞ！ トラップ発動《聖なるバリアーミラーフォース》！」

やはりミラフォだったか。前のターンに使われていたらまずかったな。

「させませんよ。カウンタートラップ《ブローニング・パワー》！ 自分フィールドのサイキック族モンスター1体を生け贄に捧げ発動！ 魔法・トラップカードの発動、モンスターの召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にして破壊する！ サイコ・ウォールドを生け贄に、ミラーフォースの発動を無効にする！」

また消えてゆくウォールドさん。ホントゴメン、ってやめて！ そんな恨めしそうな目で見ないで！

「なにっ！」

よし、これで心おきなく攻撃できる。ワールドさんありがとう。

「いけ、ヘルストランサー！ 攻撃続行だ！」

「くうっ！」

「そしてサイコ・デビルで2回連続ダイレクトアタック！ デス・ブレイン・クロウ！」

「ぐおおああああ！」

試験官

LP／2600↓—2200

「ふふ、素晴らしいデュエルだった。結果は後日郵送されるが……君ならまず合格だろうな」

そう言って手を差し出す試験官。

「ありがとうございます。楽しいデュエルでした！」

俺も手を差し出し、試験官と握手をする。互いの健闘を称えるための握手。やっぱり、こういうのは気持ちいいな。

「それでは、失礼しますね」

「ああ。今日はありがとう」



俺は試験官と別れ、自分が居た席へと戻る。

「おゝい、響弥ゝ！」

由梨がデュエルフィールドから走って来た。  
ん？ デュエルフィールドから？

「なあ、お前試験はどうした？」

嫌な予感がしたから一応聞いてみた。すると由梨は

「終わったよ。暴走召喚したエレキリン3体を結束させてダイレクタアタック。3ターン目で終わったよ」

と笑顔で言い放った。

「……相変わらずだな、お前は」

「えへへ。それよりもさ、早く帰ろ？ 私もうお腹ぺこぺこだよ」

そう言って階段を上がる由梨。

料理をするのは俺なんだがなあ、と、俺は由梨の隣で呟くのだった。

## 自分の魂は大切にすべし（後書き）

響弥「さて、作者よ。いくつか聞きたいことがあるんだが」

どうかしましたか？ 我らが主人公。

響弥「今回のデュエル、俺はラストターンに地の文でもうシンクロはする気は無い、と言っていたな」

そうですね。確かに言ってますね。

響弥「にも関わらずサイコ・デビルをシンクロ召喚した。やっていた俺が言うのもなんだが、あれはどういうことだ？」

……すみません。途中からマックス・テレポーターの存在をすっかり忘れてました。

響弥「……馬鹿めが」

返す言葉もございません……。

響弥「で、次話はどうなるんだ？」

十代や万丈目と絡むのではないでしょうか。

響弥「そのあたりが妥当だな」

それでは今回はこの辺りで失礼します。

**眠るタイピングは一度逃すと眠れない（前書き）**

第三話です。それではどうぞ。

## 眠るタイミングは一度逃すと眠れない

乗り物に弱い人！ 乗り物に乗るときにはしっかりと対策をしてから乗りましょう。お兄さんとの約束だよ！

「うう……きもちわるい……」

「あれだけ酔い止めの薬を持ってるって言ったのに。ほれ、背中さすってやるから」

只今、俺と由梨は船の上にいる。

それでもって、今は船酔いしている幼馴染みさんの背中をさすっている。まあ、こいつを介抱するのには慣れているからなにも思わないが。

「響弥あ、やっぱり船は無いよ……」

「んなもん仕方ねえだろ。俺が移動手段選んだ訳じゃねえぞ」

「今朝食べた響弥のご飯が」

「皆まで言うな」

「お、やっと見つけたぜ！」

ん？ この声は確か……。

「お前、入学試験でシンクロ召喚使ってた奴だよな！ なあ、オレとデュエルしようぜ！」

「アニキ、出会ってすぐにそれは無いと思うッス……」

翔の言うとおりだ。十代はやっぱりデュエル馬鹿なのか。

「まあ待て。まずは自己紹介から始めようじゃねえか。俺は赤崎響弥。入学試験でシンクロ召喚を使ったデュエリスト。んで、こいつは幼馴染みの鹿野川由梨だ」

「よろしく……」

俺にぐったりともたれながら十代達に手を振る由梨。乗り物に弱い人って大変だな。

「オレは遊城十代だ。十代でいいぜ。よろしくな！」

「丸藤翔ッス。よろしく！」

「さて響弥、デュエルしようぜ！」

お前はそれしか言えないのかよ。オウムか？ お前はオウムなのか？

「待て十代。見ての通り、俺はこいつの面倒をみなくちゃならない。悪いが向こうに着いたらにしてくれないか？」

顔色が悪い由梨の頭を膝の上に乗せ、身体をベンチに寝かせる。由梨は俺の持ってきた薬が効いてきたのか、寝てしまっている。

「そっか。それじゃ仕方ねえな。なら向こうに着いたら絶対デュエルしようぜ！」

「ああ。約束する」

十代と翔は俺と握手をしたあと、すぐにどこかへ行ってしまった。

「世界が違っても、十代は十代か」

ぐっすりと眠る由梨の頭を撫でながら、俺はそんなことを呟くのがあった。島に到着し、校長の話を聞いたあと。

俺は十代達と共にレッド寮まで歩いた後、それぞれの部屋で荷物の整理をしていた。因みに俺は一人部屋だ。

うん。まさかのレッドなんだ。俺、一応筆記試験二位だったんだぜ？ どうしてこうなったのか聞いてみたいものだ。

「おーい、響弥！ もう準備はできたら？ 早くデュエルしようぜ！」

外から十代の声が聞こえてきた。

なんつうか、感心するよ。デュエルにかける情熱が凄い。

俺は自分の部屋のドアを開ける。

そこにはやはりと言うべきか、十代と翔が居た。

「悪い悪い。少し時間がかかった。んで、どこでデュエルするんだ？」

「学校の中にデュエルリングを見つけたんだ。そこでやろうぜ！」

デュエルリングか。もしかして万丈目に会うイベントか？ なら行かないわけにはいかないな。

「デュエルリングか。分かったよ。そこまでの案内は任せるぞ」

「おう！ それじゃ行こうぜ……って、デュエルリングってどこにあったわけ？」

十代の言葉に思わずっこけてしまった。翔も同じようにずっこけていた。十代って、思ってたより天然なのな。

「もう、アニキが見つけたんじゃないんスか？」

「ま、改めて探せば良いさ。歓迎会までは時間があるだろうし」

「そうだよな。よし、探しに行こうぜ！」

「待ってよ、アニキ〜！」

「やれやれ。俺が居なきゃデュエルにならんだろうに」

いち早く走り出した十代。しかも厄介なことに十代は足が早い。追いつくのにかなりスタミナを使ってしまうのだろうな、と他人事のように考えながら俺は後を追った。

デュエルリングを手分けして探すことになって、それなりに時間が経った頃。俺のPDAに十代からデュエルリングを発見したと連絡があった。

そして、俺がその場所に到着したとき、十代達はブルーの生徒2人と揉めていた。

「おい十代、なんかあったのか？」

「響弥くん。あのブルーの生徒2人が、ここはオベリスクブルー専

用だって言ってる」

よし、やっぱり万丈目イベントだ。とりあえず、万丈目が来るまで粘ってみるか。

「お前たち、何を騒いでいる！」

お、この声は！

「万丈目さん！」

「誰だよあいつ？」

取り巻きが2人、万丈目の名前を呼んで、十代は頭の上にハテナマークを浮かべている。

「お前、万丈目さんを知らないのか！」

「そんなこと言われても、知らないものは知らないし、興味も湧く訳でも無いしな」

軽くジャブを入れておく。こうしておけば今夜、万丈目に呼ばれるだろう。

「オシリスレッドの落ちこぼれが、言ってくれるな。いいだろう。この万丈目さんが世間の厳しさを」

「こんな所で何をしているの？」

万丈目のセリフを遮って、GXの男前ヒロインこと明日香登場。この頃はまだヒロインって感じがしてるんだが……どうしてあんな



った。

「やっほー響弥。さっきぶりだね」

明日香の後ろから由梨が手を振っている。あいつはあいつで、すっかりと原作キャラと絡んでるんだな。

「やあ、天上院君に鹿野川君。この新入りたちがあまりにも世間知らずなんで、学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思ってね」

「貴方ねえ……。もう寮で歓迎会が始まる時間なのよ」

「チッ、仕方無いな。お前たち、引き上げるぞ」

明日香の言葉に、万丈目は取り巻きを引き連れて去っていった。

「助かった。面倒な奴に絡まれて、困っていたところだったんだ。俺は赤崎響弥だ」

「天上院明日香よ。明日香でいいわ」

「オレは遊城十代だ」

「丸藤翔ッス」

「貴方達、あまり万丈目君とは関わらないほうがいいわよ。プライドが高くて傲慢だから」

うおう、ボロクソに言われてるな万丈目。原作じゃここまで言われてなかったと思うんだが。

「明日香！ そろそろ帰らないと、歓迎会に遅れちゃうよ」

「ええ。貴方達も、早く自分達の寮に戻った方がいいわよ」

そう言って走って行く明日香と由梨。凄く慌ただしいな。まあ、イベントをこなすことは出来た。今夜が楽しみになったな。

「さて、俺達も帰るとしますか」

「そうだな。歓迎会に遅れちゃマズいぜ！」

俺達もレッド寮に帰った。

歓迎会を終え、部屋のベッドに飛び込む。歩きすぎて痛む足をマッサージしながらホワイトチョコを食べる。

どこに行くにしても、とにかく距離が遠い。レッド寮は不便この上ないな。

俺が2枚目のホワイトチョコの包装紙を剥がしたとき、机の上に置いたPDAが鳴った。どうやらメールが届いたみたいだ。

『やあ、ドロップアウトボーイ。午前0時にデュエルリングで待っている。互いのベストカードを賭けたアンティルールでデュエルだ。勇気があるなら来るんだな』

差出人は万丈目だった。

てか万丈目はどうやって俺のアドレスを調べたんだ？ あいつには教えてないんだけど……。

只今時刻は午後11時30分。そろそろ出かけるとしますか。

「フン。逃げずに来たのは褒めてやろう」

俺がデュエルリングに到着して聞いた第一声はそれだった。やっぱりこの頃の万丈目は好きになれそうにないな。

「ま、デュエルを仕掛けられたら断る気は無いよ。んで、なんで俺を呼んだんだよ、万丈目？」

「万丈目さんだ！ 決まっているだろう。まぐれでクロノス教諭に勝った遊城十代よりも、生意気にもシンクロモンスターを持つている貴様を叩き潰せば、俺の評価も上がるだろうからな！」

なんとという自己中心的な理由だ。やっぱりシンクロは止めときやよかったな。

「でもさ、こんな時間にデュエルしたなんて言えば、教員達に何言われるか分からないぜ？」

「ぐうっ……。そ、そんなことはどうでもいい！ さっさとかかって来い！」

うわお、無理やりデュエルに持ち込もうとしてるぜ。さすが遊戯王の世界だ。

「へいへい。分かったよ万丈目」

「万丈目さんだ！」

律儀にツツコミ入れてくる万丈目。恐らく元からツツコミ型の人間なんだろうな。

とはいえ、やっぱりデュエルはデュエルだ。全力でいこうか。

「デュエル！」

響弥

LP／4000

手札／5

万丈目

LP／4000

手札／5

「先攻は貰う。俺のターン、ドロー！」

万丈目が先攻か。さて、どう来るものかお手並み拝見といきますか。

「俺は《ヘルソルジャー地獄戦士》を召喚！」

ヘルソルジャー  
地獄戦士

星4／闇属性／戦士族／攻1200／守1400

出たな、地獄戦士。戦闘ダメージを相手に返す効果自体は悪くないが、自分がダメージを受けなければならぬのが勿体ないよな。

能力値も微妙な数値だし。攻撃力0ならもう少し面白かったかもな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

万丈目

LP／4000

手札／4

「俺のターン、ドロー」

今日もまああの引きか。んじゃ行ってみよう。

「俺は《パンダボーグ》を召喚する」

パンダボーグ

星4／水属性／サイキック族／攻1700／守1400

メカメカしいパンダくん。正直言えば全く可愛く無い。

「バトルだ。パンダボーグで地獄戦士を攻撃。パンダボーグ・パンチ！」

「チィッ！ この程度！」

万丈目

LP／4000↓LP／3500

「だが、地獄戦士が戦闘を行うことで発生したダメージは、貴様も受ける！」

ま、このくらいは必要経費ってね。

響弥

LP／4000↓LP／3500

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

響弥

LP／3500

手札／3

「俺のターン、ドロー！ ……フッフ、フハハハ！」

ドローしたカードを見て、万丈目が笑い出した。良いカードを引いたか？

「やはりオシリスレッドはオシリスレッドだということか。俺の勝利は確定した！」

いきなり勝利宣言かよ。なら見せて貰おうか、オベリスクブルーの実力ってものを。

「俺は《死者蘇生》を発動！ 墓地から地獄戦士を特殊召喚する！ さらに地獄戦士を生贄にして、《ヘルジェネラル地獄將軍・メフィスト》を召喚！」

地獄將軍・メフィスト

星5／闇属性／悪魔族／攻1800／守1700

「さらに、装備魔法《デーモンの斧》2枚を装備させる！ これでメフィストの攻撃力が1000ポイントアップする！」

地獄將軍・メフィスト

ATK／1800↓3800

ほー、攻撃力が3000を超えたか。なかなかやるな。腐ってもオベリスクブルーって所か。

「バトルだ！ 地獄將軍・メフィストでパンダボーグを粉碎する！」

「うおっと……」

響弥

LP／3500↓1400

「さらに、地獄將軍・メフィストの効果発動！ 相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚すてる！」

「だが、それにチェーンして戦闘破壊されたパンダボーグの効果発動。ライフを800払うことで、デッキからレベル4のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する。ディストラクターを特殊召喚だ」

ディストラクター

星4／地属性／サイキック族／攻1600／守400

「雑魚などどうでもいい。さあ、俺から見て右側の手札を捨てろ！」

あ、サイコ・ウォールドさんが……。いつもありがとな。

「俺はターンエンドだ！ さあ、もう諦めたらどうだ？ やはりオシリスレッドでは俺には勝てないんだよ！」

「なに言っただよ。まだ勝負は着いてないだろ？ こっからデュエルは楽しく、面白くなるんだぜ？ 俺のターン、ドロー！」

よし、これで後は。

「ディストラクターの効果発動。ライフを1000払うことで、相手フィールドにセットされた魔法またはトラップカード1枚を破壊する。その伏せカードを破壊するぜ」

響弥

LP / 1400 ↓ 400

「チッ！ 悪足掻きを……！」

おお、炸裂装甲か。危ないね、やっぱ割られるフラグなのか。

「さらにトラップカード《サイコ・トリガー》を発動。自分のライフが相手ライフよりも下の場合に発動可能。墓地のサイキック族モンスター2体を除外して、カードを2枚ドローする。パンダボーグとメフィストの効果で捨てられた《サイコ・ワールド》を除外して、カードを2枚ドロー」

よし、これで見えたぜ。勝利への道が！

「手札1枚をコストに、装備魔法《D・D・R（ディファレント・デイメンション・リバイバル）》を発動。除外されているサイコ・ワールドを特殊召喚する」



パンダボーグでも良いんだけどな。ワールドさんに来て貰おう。

サイコ・ワールド

星4／地属性／サイキック族／攻1900／守1200

「さらに、デストラクターとサイコ・ワールドを生贄に、《マスター・ジグ》を召喚！」

マスター・ジグ

星8／地属性／サイキック族／攻2600／守1400

「トラップカード《サイコ・ヒーリング》発動。自分フィールド上に存在するサイキック族モンスター1体につき、ライフを1000ポイント回復する」

響弥

LP／400↓1400

「マスター・ジグの効果発動。ライフを1000ポイント払うことで、自分フィールド上に表側表示で存在するサイキック族モンスターの数だけ、相手フィールドのモンスターを破壊する！」

「なに!？」

「地獄將軍・メフィストを破壊するぜ。サイキック・クラッシュユ！」

響弥

LP／1400↓400

「これで仕上げだ。装備魔法をマスター・ジグに装備する。サイコ・ソードはサイキック族モンスターにしか装備できない。自分のライフが相手ライフよりも低い場合、その数値だけこいつを装備したモンスターの攻撃力がアップする。最大で2000ポイントまでだな」

マスター・ジグ

ATK／2600↓4600

「こ、攻撃力4600だと!？」

「バトルだ。いけ、マスター・ジグでダイレクトアタック! マスター・クラッシュ!」

「う、うわああああ!」

万丈目

LP／3500↓1100

ふう。どうにか終わったな。良かった良かった。

「くっ……何故だ。何故俺が!」

万丈目は跪いて悔しがっている。なんらかのフォローはしておきたいのだが……俺の言葉なんか聞いてくれるのか?

「なあ、万丈目」

「五月蠅い! 俺に話しかけるな!」

あーやっぱりねー。まあ、そんな感じはしてたんだよな。

「んじゃ、俺は帰るから。ガードマンに見つかるなよ」

「くううつ……クソォ！」

あゝ、聞く耳持たずって奴だねこりゃ。放っておくしか無いか。

俺は万丈目に一応手を振りながらデュエルリングを後にした。

うーん、目が冴えて眠れそうにないな。新しいデツキでも考えるかな。

## 眠るタイミングは一度逃すと眠れない（後書き）

響弥「なあ、作者よ。気になったことがあるんだが」

なんだろうか。

響弥「何故俺がサイコ・ウォールドをさん付けで呼んでいたんだ？」

ああ、あれは私のウォールドさんに対する感謝の気持ちと言いますか。

響弥「感謝の気持ち？」

まず前提として、私がリアルで使ってるデッキが、今のあなたのデッキなんですよ。

響弥「なるほど。それで？」

野良試合で、ウォールドさんの効果に何度も助けられてるんですよ。私の近くのカードショップでは、「サイコ・ウォールドはセバスの嫁」なんて言われてます。

響弥「……胸を張れるほどのことか？」

つまり、ウォールドさんはこれからも私の小説ではよく出てくるかもって話です。最良目で見ちゃうのは仕方無い。攻撃力も効果も強いんだもん。私の嫁だもんね。

響弥「あー、作者が自分の世界に入ってしまったので、今回はここまでだ。次回は女子寮でのデュエルらしい。なんでも新しいオリキヤラが出て来るらしいが……。まあ、愛想を尽かさなかったら、見てやってくれ」

**誘いにホイホイついて行くことなかれ（前書き）**

長くなりそうなので投稿。続きは三日以内には……

## 誘いにホイホイついて行くことなかれ

授業というものは、どの世界であっても退屈なものだ。その内容が知っているものなら尚更。

「よろしいノーネ？ カードの種類ゝハ、大きく分けて三種類ありマゝス」

デュエルアカデミアでの授業。物凄く初歩的な、それこそ知らない人はいないような知識の確認授業だ。

眠い。分かりきってるからめっちゃ眠い。今日のこの授業はパスしても良かったかもな。現に隣に座っている由梨は既に夢の中へと旅立っている。

「すう……すう……」

幸せそうな顔して寝おって。寝息まで聞こえるじゃないか。

「シニョーラ鹿野川。問題ナノーネ」 げ、由梨が当てられたか。やれやれ、起こすしかないよな。

「おい、由梨。当てられたぞ」

「ふえ？ はあい……」

俺が揺すってやるとノロノロと起きる由梨。因みに起こし方にはコツがあるんだが、今は関係ないな。

「最近話題になっている、シンクロ召喚及び、シンクロモンスター

について説明するノーネ」

「ふわあ……。シンクロ召喚は、自分フィールドに表側表示で存在するチューナーという種類のモンスターと、その他のモンスター1体以上のレベルが、召喚したいシンクロモンスターのレベルと同じになった時に可能になる召喚方法のこと。

まず、召喚したいシンクロモンスターのレベルとレベル合計が同じになるように、チューナー1体とその他のモンスターを墓地に送る。その後、シンクロモンスターを表側攻撃表示か守備表示で特殊召喚する。この一連の流れがシンクロ召喚。シンクロモンスターは、融合モンスターと同じようにエクストラデッキに置くモンスターカードのことで、カードの枠の色は白色。基本的にシンクロ召喚はメインフェイズにしか行えないけど、効果によってシンクロ召喚を行うカードも存在する。これくらいでいいですか？」

「も、もういいノーネ。座って下サ〜イ」

「はあい……ぐう」

座った瞬間に寝やがったよコイツ。某眼鏡少年くらいの早技だな。その後授業は原作通り、翔が当てられるも答えられず、それをクロノス教諭が馬鹿にして、そして十代が教諭をからかって終了。授業の時間は面白さを期待できそうに無いな。

所変わって、更衣室。体育の授業が終わった為、着替えをしている。

「なあ響弥。そのクーラーボックス、何が入ってるんだ？」

俺のロッカーの中にあるクーラーボックスに気づいて話しかけて



きた十代。

「ん？ ああ、この中にはお菓子が入ってるんだ。チョコレートとかどら焼きとか、シュークリームとか」

そう言ってクーラーボックスを開けて、十代に中身を見せる。

「すごいな。本当にお菓子ばかりだ」

「傷みやすいものが殆どだからな。こうして冷やしておく必要がある。ちなみにどら焼きやシュークリームは手作りだ。食べてみるか？」

「おっ、サンキュー！」

シュークリームにかぶりつく十代。美味そうに食う奴だな。

「ウマイ！ これすっげえウマイぜ！」

「お、おう。そりゃ良かった」

ちくしゅう。照れちゃった。由梨以外に食べさせたことなかったから、美味いって言われると恥ずかしいな。

「さて、そろそろ戻ろうか。貴重な昼休みが無くなる」

「そうだな！ よし、翔。あれ、翔？ あいつ、どこに行ったんだよ」

「悪いが先に帰らせて貰うぞ。由梨が腹を空かせて待っているだろ

うから」

「分かった。それじゃあな！」

「ああ、また後でな」

クラーボックスの中の由梨の弁当を持って、俺は更衣室を後にした。それにしても、翔の奴は何処に行ったんだろうな。その夜。今、俺は新しいデッキの最終調整をしている。作成中のデッキは、向こうの世界に居たとある人が使っていたデッキだ。

一時間後、デッキ完成。ようやくといった感じだ。暇になったし、十代の部屋に遊びに行くかな。

原作とは違ってレッド寮は部屋の数だけが多い。一人一つ部屋を持てる。その変わりか分からないが、レッド寮の外見がめっちゃボロい。

ま、一人部屋が持てるだけ、良しとしなければな。

「うーす、邪魔するぜー」

十代達の部屋の扉を開ける。そして部屋の中の光景を見て、思わずわえていたポツ〇ーを落としてしまった。そこには、床に仰向けに倒れる顔を赤くした悪魔と、それに覆い被さるようにしている十代が居たのだ。俺にはまるで、十代がその悪魔を襲っているかのように見えた。

友達のこんな場面に出くわした時の正しい対処方法の一つ。

「フッ。俺としたことが粹じゃねえな。すまない十代。ゆっくり楽しんでくれ」

「待て響弥！ これは違う！ 違うんだああ！」

部屋を去ろうとした俺の足に、十代が物凄いスピードでしがみついていた。

「どうした十代。あの悪魔の女の子とチョメチョメするんじゃないのか」

「チョメチョメってなんだよ！ とにかく話を聞いてくれえ！」

「なるほど。その部屋の隅っこで三角座りしてるのが、お前の精霊のユベルで、実体化しているときにバランスを崩してあのような状態になった、と」

「そうなんだよ。良かったぜ、誤解が解けて」

いやあ、ビックリしたね。

もしかしたら十代とユベルが一線を越えた関係なのかと、疑ってしまったじゃないか。

あ、ユベルが居るのには驚かない。二次創作ではある種の定番だからな。

因みに十代とユベルは一つに（性的な意味じゃ無いよ）なることが出来る。一つになった時は、アニメの超融合後みたいな感じになるらしい。ユベルの精霊としての力を使うことで、モンスターを実体化することも可能なんだってさ。

「んじゃ、この辺で俺は部屋に戻らせて貰う。お前はユベルを慰めてやりな」

「お、おう。なんか悪いな」

「気にすんな。俺には俺でやることがあるから」

俺はそう言って十代の部屋を出て、自分の部屋に戻った。

「さて、と。イリカ、出て来い」

『はい。お呼びでしょうか、マスター』

俺が呼ぶと、杖を持ち、ファンシーな服装の半透明の少女が俺の前に現れた。

そう。俺がこの世界に来るきっかけとなったデュエルモンスターの精霊、サイ・ガールのイリカだ。

イリカは俺がこの世界に来た時から、俺の精霊として共に過ごしている。そして、イリカに言われた『能力』の選択権を一つ使用して、俺はサイキックの力を手に入れた。

俺のサイキックの力ってのはざっくり言えば念力のこと。念力とは言っても、超能力特番なんかでよくやってるスプーン曲げとは少し違う。

簡単に言えば、見えない力を発生させる能力。実体は無いからいくらでも応用が利く、かなりハイスペックな能力だ。

「さて、今日も練習してみるか」

「はい。まずは……このアルミ缶を念力で飛ばして下さい」

実体化して机の上に缶を置くイリカ。どこから出したんだよ、その缶。

「おう。……はあっ！」

俺が意識を集中させると、アルミ缶が飛んでいった。

「いたあっ！」

イリカの頭に。

『んゝっ！ やっぱりマスターのチョコレートパフェはおいしいですゝ』

「ははは。褒めて貰えて嬉しいよ」

空き缶をイリカにぶつけた後、その機嫌が良くなるまで謝り倒し、お詫びとしてパフェを作った。おかげで今週分のチョコレートが尽きたぜ。

まあ、俺が完全に悪いわけだし、仕方ないか。

『んう？ マスター、メールが届いてますよ』

「メール？ はて、誰からだろうか……」

差出人は不明だった。変なメール……あつ、思いだした。今日はラブレター事件の日だったのか。

デッキとデュエルディスクを持ってと。

『見なくてもいいんですか？』

「何が送られてくるか分かるからな。ほら、準備しろイリカ」

『はい』

イリカを連れて外に出ると、十代が自分の部屋から出て来ていた。丁度良いタイミングだな。

「響弥、大変だ！ 翔が捕まったってメールが来たんだ！」

「分かっている。俺の所にもそんなメールが来ていた。行くなら早く行くぞ」

「おう！ って、オレ女子寮の場所知らないぜ？」

「なら俺が案内する。行くぞ、十代」

「頼むぜ！ 待ってろよ、翔。すぐに助けてやるぜ！」

十代と俺は女子寮に到着した。

そこには、ロープで拘束されている翔と、それを持つ明日香、その後ろに枕田ジュンコと浜口ももえ。そして、黒く長い髪をポニーテールにしている女子生徒が居た。

んで、明日香からなぜ翔が捕まっているのかについての説明があった。本当にくだらないがな。翔の自業自得でしかない。

「ところで、どうして響弥まで来ているの？」

「それはあたしが呼んだからだな」

明日香の疑問に黒髪ポニーテールが答えた。てことは、俺の所に  
来てたメールはあいつのだったのか。

「さあ、赤崎響弥！ この《黒翼の暴風》天斗夜奈とデュエルしろ  
あまとやな  
！」 ビシッと指を差しながら啖呵を切るポニテこと天斗。  
うん。突っ込みたいところは山ほどあるんだが。

「なんだよそのイタイ二つ名は。言ってて恥ずかしくないのか？」

「なっ！？ お前、あたしの格好いい二つ名をバカにしたな！？」

「さすがに自分で名乗るのは、私でも恥ずかしいわね」

「アタシも」

「イタイ娘にしか見えませんわね」

明日香とジュンコは呆れた顔で、ももえは笑顔で言った。何気に  
ももえが一番酷い気がしたな。その笑顔は辛いよ。

「と、とにかく！ 今からお前はあたしとデュエルするんだよ！  
拒否なんかさせないからな！」

はあ……。どうやらハズレくじを引いちまったらしいな。

「分かったよ。要は俺と十代が勝てば、翔を解放するってことだろ  
う？」

「そういうことよ。さあ十代、私達はボートの上でやりましょう」

「よっしゃ、望むところだぜ！」

何故ボートの上でやる必要があるんだ。まるで意味が分からないな。

「さあ、あたし達も始めるぞ！」

「天斗、そんなに焦るなって。デュエルは逃げたりしないぞ」

「天斗って呼ぶな、夜奈って呼べ！　あたしはその方が好きなんだ！」

やいやいとうるさい奴だな。従わないと面倒そうだ。

「分かったよ、夜奈」

「上出来だ。あんたのことは、響弥って呼ばせて貰うからな！」

「分かった分かった。好きに呼んでくれ」

嬉しそうにデュエルディスクを構える夜奈。続いて俺もデュエルディスクを構える。

「「デュエル！」」

響弥

LP／4000

手札／5

夜奈



LP／4000  
手札／5

さて、黒翼の暴風と呼ばれるデュエリストがどれだけの力を持っているのか、見せて貰おうかな。

「あたしのターン、ドロー！　あたしは《BF―蒼炎のシュラ》を召喚！」

BF―蒼炎のシュラ  
星4／闇属性／鳥獣族／攻1800／守1200

BFかよお！　黒翼って言ったから、まさかとは思ったが……いや、マズいなこれは。単純に力で押し負ける可能性もあるだろう。

「さらにカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

夜奈  
LP／4000  
手札／3

「俺のターン、ドロー」

む……手札が悪い。この手札でどこまで耐えられるかな？

「モンスターを裏守備表示でセット。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

響弥

LP／4000

手札／4

「どうした！ このあたしの仲間に怖じ気づいたのか？ あたしのターン、ドロー！」

夜奈がニヤリと笑う。いや、BFは洒落にならんから。

「永続魔法《黒い旋風》を発動！ このカードが存在する限り、あたしが『BF』を通常召喚する度にデッキからそのモンスターより攻撃力が低い『BF』を手札に加えることが出来る！ そしてあたしは、《BF―漆黒のエルフェン》を召喚！」

BF―漆黒のエルフェン

星6／闇属性／鳥獣族／攻2200／守1200

「こいつは自分フィールドに『BF』が存在すれば、リリース無しで召喚できる！」

「させるか。トラップカード《激流葬》発動。モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚時、フィールド上のモンスター全てを破壊する！」

激→流←葬↓じゃないよ、激流葬だよ。一応入っていたんだが、どうにかなりそうだな。

「くっ！ すまないシユラ、エルフェン。だが、お前達の犠牲は無

駄にはしない！ 手札から《BF―流離いのコガラシ》の効果発動！ 流離いのコガラシは、自分フィールドの『BF』が破壊され墓地に送られた時、手札から特殊召喚できる！ 行け、コガラシ！」

BF―流離いのコガラシ

星6／闇属性／鳥獣族／攻2300／守1600

「ぐっ、コガラシかよ！ こりゃマズい」

冗談抜きでキツイ状況だ。まさかコガラシが出てくるとはな。おまけに俺の場はがら空き。ダメージは免れないか。

「バトルだ！ コガラシ、プレイヤーにダイレクトアタックだ！」

「ぐっ…」

響弥

LP／4000↓1700

「あたしはこれでターンエンドだ。さあ、反撃してこい！」

夜奈

LP／4000

手札／1

「俺のターン、ドロ―」

やれやれ、無茶言ってくれるな。今の手札じゃどうやっても反撃

は不可能。ここは守りに入らせて貰おうか。

「俺はチューナーモンスター《クレボンス》を守備表示で召喚。そして装備魔法《念動増幅装置》をクレボンスに装備。カードを2枚伏せてターンエンドだ」

クレボンス

星2／闇属性／サイキック族／攻1200／守400

響弥

LP／1700

手札／1

「むう、つまらないな。攻めて来いよ！ あたしのターン、ドロー！」

さて、この布陣をどう崩して来るのかな？ 怖いけど少し楽しみだ。

「あたしはマジックカード《黒羽の宝札》を発動！ 手札の《BF―追い風のアリゼ》を除外して、カードを2枚ドロー！ そして、《BF―精鋭のゼピュロス》を召喚！」

BF―精鋭のゼピュロス

星4／闇属性／鳥獣族／攻1600／守1000

「ゼピュロスの召喚に成功したことにより、黒い旋風の効果発動。デッキから《BF―蒼天のジェット》を手札に加える。バトルだ！ ゼピュロスでクレボンスを攻撃！」

「クレボンスの効果発動。こいつが攻撃対象に選択されたとき、ライフを800払うことで攻撃を無効に出来る。さらに念動増幅装置の効果により、サイキック族の効果発動時に支払うライフが必要なくなる」

「それじゃあ、その装備魔法を破壊しない限り、無限に攻撃を止められるってことか。だが、突破口は見えてるぞ！　トラップカード《ゴットバード・アタック》を発動！　鳥獣族モンスター1体をリリースし、相手フィールドのカード2枚を破壊する！　ゼピュロスをリリースし、クレボンスと左の伏せカードを破壊だ！」

「チッ。チェーンしてトラップ発動、《サイコ・ヒーリング》！　自分フィールドに表側表示で存在するサイキック族モンスター1体につき、1000ライフポイントを回復する！」

響弥

LP／1700↓2700

「続けて行くぞ！　流離いのコガラシでダイレクトアタック！」

「永続トラップ《サイコ・チューン》発動！　墓地のサイキック族を攻撃表示でチューナーとして復活させる！　さあ蘇れ、クレボンス！」

破壊されたのがサイコ・ヒーリングで良かった。これでどうにか凌ぎたいな。

「くっ、コガラシでクレボンスを攻撃！」

「クレボンスの効果発動。ライフを800払い、攻撃を無効にする」

響弥

LP／2700↓1900

「むう……思うようにはいかないな。ターンエンドだ」

夜奈

LP／4000

手札／2

「俺のターンだ。ドロ」

そういや、ももえとジュンコは明日香のデュエル見てるんだな。  
まあ、余計なギャラリーはいないほうが楽ではある。 ふむ、こいつが来たか。

「魔法カード《強欲な壺》。デッキからカード2枚をドロ」

よし、いいな。面白いことになりそうだ。

「俺のホームグラウンドへ招待するよ。フィールド魔法《脳開発研究所》発動！」

フィールド魔法ゾーンにカードをセットすると、辺りの風景が変わる。

そこは沢山の怪しげな機械に囲まれた研究所。その中心には培養液で満たされた中に無数のコードが繋がれた脳がある。

怪しいことこの上ない空間だが、サイキック族、そしてサイキッ

ク族を従える俺にとっては最高の環境だ。  
悲しいかな、この研究所の良さを理解してくれる人はいないんだが。

「凄い……。まるでアニメに出てくる研究所じゃないか」

「どうだ、気に入ったかい？」

「ああ、気に入ったよ！ 凄く格好いい！ なんかこう、秘密結社のアジトみたいな感じで！」

「分かってくれるか、この研究所の良さを！ お前とは仲良くやっていけそうだ！」

いやあ、嬉しいな。この研究所の良さを分かち合う仲間を見つけることが出来て、テンション上がっちゃってる。

でも、それでプレミスしちゃ意味ないからな。デュエルはデュエルだ。

「いくぞ。俺は《アーマード・サイキッカー》を召喚。アーマード・サイキッカーは、自分フィールドにサイキック族モンスターが表側表示で存在していれば、生贄無しで召喚できる」

アーマード・サイキッカー

星6／地属性／サイキック族／攻2200／守1800

「エルフエンと同じような召喚条件か」

「ああ。そして、脳開発研究所の効果を使う。この研究所の中では、通常召喚に加えて1度だけサイキック族モンスター1体を召喚でき

る。この効果でモンスターを召喚したら研究所にサイコカウンターが置かれるがな。俺は脳開発研究所の効果で、《サイコ・ウォールド》を召喚」

サイコ・ウォールド星4／地属性／サイキック族／攻1900／守1200

脳開発研究所

サイコカウンター 1

「そして、レベル6のアーマード・サイキッカーに、レベル2のクレボンスをチューニング！」

「っ、まさか！」

「超常なる力を宿し妖しく笑うモノよ。今ここに魂を繋ぐ契約を交わし、我に力を宿せ！ シンクロ召喚！ 現れろ、我が魂。《メンタルスフィア・デーモン》！」

メンタルスフィア・デーモン

星8／闇属性／サイキック族／攻2700／守2300

俺のデッキのエースモンスターの登場だ。

さあ、反撃といかせて貰おうか！



誘いにホイホイついて行くことなかれ（後書き）

響弥「あれ、まだ決着ついてないぞ？」

前書きに書いた通り、長くなりそうなので一旦区切ったんですよ。

響弥「ふーん……」

超つまらなさそうにしていますね。なにが不満なんですか？

響弥「いや、俺自身不満がある訳じゃなくて、こいつがな」

由梨「そろそろデュエルさせてくれない頃じゃないのかな、作者さん？」

ひいっ！ 頭掴まないで！ グって力入れないで！

響弥「由梨、自己紹介」

由梨「あ、皆さん初めまして。後書き初出演の鹿野川由梨です」

やめて！ 人の頭掴みながら自己紹介しないで！

由梨「今まで私ひとつもいいところないじゃん！ 船酔いして授業中に寝て当てられて、馬鹿力持ってる設定も今のところ生かせてないし。挙げ句の果てに初デュエルを新キャラに先を越されるしさ！」

今は我慢してくださいよ。後々活躍しますから。なんてったって、

一応メインヒロインなんですから。

由梨「一応って言うなあああ！」

ぎゃああああ！ ギブギブギブ！ 頭蓋骨が死ぬる！

響弥「ま、こんな感じだが、愛想尽かさず見てくれたら嬉しいよ。  
あと、ミスや指摘があったらどんどん言って欲しい。それじゃ、また次回だ」

**決闘のち友情、ところにより暗躍（前書き）**

前回のデュエルの続きです。それではどうぞ。

## 決闘のち友情、ところにより暗躍

「現れろ、我が魂。《メンタルスフィア・デーモン》！」

メンタルスフィア・デーモン

星8／闇属性／サイキック族／攻2700／守2300

「こいつが俺のエース。メンタルスフィア・デーモンだ」

「これが、響弥のエース……」

さあ、反撃といくぜ！

「対象が失われたサイコ・チューンは破壊される。サイコ・チューンが破壊された時、俺はこのカードによって特殊召喚したモンスターのレベル×400ポイントのダメージを受ける。特殊召喚したクレボンスのレベルは2。800ポイントのダメージを受ける」

響弥

LP／1900↓1100

「いくぞ、サイコ・ワールドの効果発動！ ライフを800払うことで、サイキック族モンスター1体の2回攻撃を可能にさせる。そして、脳開発研究所の効果。サイキック族モンスターの効果を発動するために払うライフを、研究所にサイコカウンターを1つ置くことで代用できる」

「くっ、さすがサイキック族のホームグラウンドだな」

脳開発研究所

サイコカウンター 2

「さあ、バトルだ。メンタルスフィア・デーモン、流離いのコガラシを攻撃！ サイコ・ヴィシャス・クロー！」

「くうっ！ だが、手札の《BF―蒼天のジェット》の効果発動！ 戦闘ダメージ計算時、手札から墓地へ送ることで、自分フィールドに存在する『BF』はその戦闘では破壊されない！」

夜奈

LP／4000↓3600

ジェットか。確かゼピュロスを召喚した時に、黒い旋風で手札に加えてたんだっけ。

「だが、まだ攻撃は続く！ もう1度メンタルスフィアでコガラシを攻撃！」

「ぐあっ！ すまない、コガラシ……」

夜奈

LP／3600↓3200

「メンタルスフィア・デーモンの効果発動！ 戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分、自分のライフを回復する！ コガラシの攻撃力は2300。よって、ライフを2300回復！」

響弥

LP／1100↓3400

これで俺のライフは一気に回復した。他のサイキック族モンスターで支払ったライフを、サイキック族シンクロで回復する。これがサイキック族の1つのテーマだ。

「これで俺はターンエンドだ」

響弥

LP／3400

手札／0

「なかなかやるな。あたしのターン、ドロー！」

さて、どう来るんだろうな。奴の場にはモンスターはいない。この状況を、どう覆す？

「あたしはチューナーモンスター、《BF―そよ風のブリーズ》を召喚！」

BF―そよ風のブリーズ

星3／闇属性／鳥獣族・チューナー／攻1100／守300

「ブリーズの召喚に成功したことにより、黒い旋風の効果発動！《BF―下弦のサルンガ》を手札に加える。さらに、墓地の精鋭のゼピュロスの効果発動！自分フィールドに表側表示で存在するカード1枚を手札に戻すことで、墓地のこのモンスターを特殊召喚する！だが、この時に400ポイントのダメージを受ける。黒い旋風を手札に戻し、墓地のゼピュロスを特殊召喚！」

夜奈

LP／3200↓2800

おい！ 下弦のサルンガって、確か漫画版のBFだよな！

「さらに、《強欲な壺》を発動！ デッキからカード2枚をドロ―する！ そして手札から、《BF―下弦のサルンガ》、《BF―白夜のグラディウス》、《BF―黒槍のブラスト》を特殊召喚！ こいつらは全て、自分フィールド上に『BF』が存在していれば、手札から特殊召喚できる！」

BF―下弦のサルンガ

星2／闇属性／鳥獣族・チューナー／攻500／守500

BF―白夜のグラディウス

星3／闇属性／鳥獣族／攻800／守1500

BF―黒槍のブラスト

星4／闇属性／鳥獣族／攻1700／守800

ははは……マジかよ。お前はとんでもない奴だぜ、夜奈。

「響弥！ お前はあたしにエースを見せてくれた！ だから、あたしもデッキのエースを紹介するぞ！ レベル4の黒槍のブラストに、レベル3のそよ風のブリーズをチューニング！ さらに、レベル3の白夜のグラディウスに、レベル2の下弦のサルンガをチューニング！」

今までに無い、それこそむこうの世界の大会でも味わったことの

無い感覚だ。

興奮、してるんだろうな。俺は。

「シンクロ召喚！ 《BF―アーマード・ウィング》！  
煌星のグラム》！」

BF―アーマード・ウィング

星7／闇属性／鳥獣族／攻2500／守1500

BF―煌星のグラム

星5／闇属性／鳥獣族／攻2200／守1500

「さらに、リバーズカード《シンクロ・クリード》を発動！ フィールド上にシンクロモンスターが3体以上表側表示で存在するとき、カードを2枚ドロウする！」

シンクロ・クリードまで使うのか。恐ろしい奴だ。本当にクロウみたいなデュエルしやがる。

「バトルだ！ アーマード・ウィングでメンタルスフィア・デーモンを攻撃！ さらにダメージステップ時、《BF―月影のカルート》の効果発動！ 手札から墓地に送ることで、バトルを行う自分の『BF』と名のつくモンスターの攻撃力は、エンドフェイズまで1400ポイントアップする！ くらえ、ブラック・ハリケーン！」

BF―アーマード・ウィング

ATK／2500↓3900

「ぐああっ！」

響弥



LP／3400↓2200

くっ。ダメージは大したことないが、衝撃が半端じゃねえ。ソリッドビジョンの凄さを感じるな。

「さらに、煌星のグラムでサイコ・ウォールドを攻撃！ クレセント・スライス！」

「ぐうっ！」

響弥

LP／2200↓1900

「あたしはターンエンド。これがあたしの全力だ！」

夜奈

LP／2800

手札／1

すげえ……。この感覚は、アイツと同じ感覚だ！

「ふっ……ふははははは！」

「ど、どうした？」

「最っ高だ……！ 最っ高におもしれえよアンタ！ こんなに興奮したのは、由梨と初めてデュエルした時以来だぜ！」

「響弥……」

「俺のターン、ドロ―！ アンタのデュエルは最高だ！ 俺も全霊で挑ませて貰うぜ！ 魔法カード《命削りの宝札》発動！ 手札が5枚になるようにカードをドロ―し、5ターン後に手札を全て捨てる！ 俺の手札は0だ。よって、カードを5枚ドロ―！」

「なっ！ ここで命削りの宝札だと！？ インチキドロ―もいい加減にしろ！」

「魔法カード《死者蘇生》発動！ 墓地からメンタルスフィア・デ―モンを特殊召喚！」

インチキなんて言ってるが関係無い。もう勝利への道を見つけたんだ。後は突っ走るだけだろ！

「んじやいくぜ！ 俺は《サイコ・コマンダー》を召喚！ さらに、研究所にカウンターを置いて、《パワー・インジェクター》を召喚！」

脳開発研究所

サイコカウンター 3

サイコ・コマンダー

星3／地属性／サイキック族／攻1400／守800

パワー・インジェクター

星4／地属性／サイキック族／攻1300／守1400

「さらに、永続魔法《一族の結束》発動！ 墓地に存在するモンスター1の元々の種族が1種類のみの場合、自分フィールドに表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力が800ポイントアップ

する！」

メンタルスフィア・デーモン  
ATK／2700↓3500

サイコ・コマンダー

ATK／1400↓2200

パワー・インジェクター

ATK／1300↓2100

「そして装備魔法発動！ こいつを装備したサイキック族モンスターの攻撃力は、相手とのライフポイントの差分アップする！」

メンタルスフィア・デーモン  
ATK／3500↓4400

「攻撃力が、4000を超えたか……」

「まだだ、まだ終わらない！ パワー・インジェクターの効果発動！ 600ポイントライフを払うことで、自分フィールドに表側表示で存在するサイキック族モンスター全ての攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップさせる！ この効果のコストを、研究所にカウンターを置くことで代用する！」

脳開発研究所

サイコ・カウンター4

メンタルスフィア・デーモン  
ATK／4400↓4900

サイコ・コマンダー

ATK／2200↓2700

パワー・インジェクター

ATK／2100↓2600

「バトルだ！ メンタルスフィア・デーモン！ 煌星のグラムを攻撃！ そしてダメージステップ時、サイコ・コマンダーの効果発動！ 自分のサイキック族モンスターがバトルする場合、ライフを500ポイントを上限として100の倍数で払い、払った数値分、バトルを行う相手モンスターの攻撃力をダウンさせる！」

響弥

LP／1900↓1400

BF―煌星のグラム

ATK／2200↓1700

「グラムの攻撃力が……いや、それだけじゃない！ ライフポイントの差が広がったことで、メンタルスフィアの攻撃力も……！」

メンタルスフィア・デーモン

ATK／4900↓5400

「こ、攻撃力5400だと!？」

「これが俺の全力だ！ 行け、メンタルスフィア・デーモン！ サイコ・ヴィシヤス・スラッシュ！」

「うああああっ！」

夜奈

LP／2800↓0

決着、か。凄いデュエルだった。明日の分のエネルギーまで燃え尽きたぜ。

「ふ、ふふふ！ あはははは！ 凄いな、響弥。完敗だよ！ 負けでもここまで楽しいと思えたのは、久しぶりだ！」

そう言って俺に笑顔を向ける夜奈。その顔は、負けたとは思えないほどに清々しいものだ。

「ああ、俺もだ。お前とのデュエル、最高に楽しかったよ！」

俺も素直に感想を述べる。そして、構えている夜奈に合わせ、拳を突き合わせた。

「次は、負けないからな！」

「望むところだ。また全力を尽くそう！」

俺と夜奈はそう言った後、また笑いあった。お互いの健闘を称えるように。

「青春してるわね。ああいうの、少し羨ましいわ」

「青春とは少し違うと思うッス……。というか、僕達のこと忘れてるっぽいッスね」

「くうく！ オレもアイツらと戦いたいぜ！ あん熱いデュエル見せられて、我慢できるかよ！」

そんなことを言われているとも知らずに。 暗い空間の中に、大きなモニターがある部屋。

そのモニターから響弥と夜奈のデュエルを見ていた、男にも女にも見える人物は、腕を組みながら少し微笑んだ。

「フフフ……」

その部屋に、大柄な青年が入った。青年は豪華な装飾が施された黒い羽織りを羽織っている。

「どうかしたか、J。また不都合が生じたか？」

「いいえ、そうではありませんよ。これをご覧ください」

Jと呼ばれた人物は、大柄な青年にモニターを見るよう促す。

「ほう、これは……」

モニターを見た青年は、ニヤリと笑った。その笑みは、邪悪な意思が込められているであろう笑みだった。

「今回は、少し長く楽しめそうですよ。実力のある例外イレギュラーが既に三人は居ます」

そう言ってJは青年に向き直る。

「三人……か。まだ足りないな」

「ええ。せめて、我々と同じ数は欲しい所です」

「当然、まだ宛は有るのだろうか？」

「勿論です。いずれは導かれるでしょう」

「そうか。そうでなくては、な」

青年はそう言うと、部屋を後にした。

「楽しみにしております。我が“■■■”、赤崎響弥。貴方様と合間見える、その時を……」

Jは微笑む。その微笑みと言葉に隠された真意は、誰にも知られることは無い……。

## 決闘のち友情、ところにより暗躍（後書き）

響弥「前回からのデュエルが終わったな」

そうですね。

響弥「手札補強カードを乱用したな」

そうですね。

響弥「漫画版BFなんて属性は分からないだろ。というか、漫画版のカード出して良かったのか？」

オリカ有りって書いてますし、いいんじゃないですか？  
属性はBFってことで闇にしました。

夜奈「BFには光が1体だけいるけどな」

響弥「お、夜奈。ここじゃ初めてだな」

夜奈「どもー、後書き初登場、天斗夜奈でーす」

光属性のBF？ ……ああ、アウロラですか。アニメの効果でもOCGの効果でも使いにくいあれですね。

夜奈「アーマード・ウィング、ブラック・ハリケーン」

ぐほあっ！ 不意打ちとは卑怯なり……。



響弥「作者が倒れたから今回はここまでだ。ミスや指摘があればどんどん言って欲しい。あ、次回の更新は少し遅れるらしいから、気長に待ってくれるとありがたい」

夜奈「それじゃまたな！　これからよろしく！」

## テストは普段の積み重ねが結果になる（前書き）

今回は月一テストです。ようやくヒロインがデュエルします。それではどうぞ。

## テストは普段の積み重ねが結果になる

質問だ。みんなはテストって好きか？

まあ、好きなんて答える人はそういないだろう。ちなみに俺の元の世界の級友は早く家に帰ることができるから好きだって奴もいたが。

そう、俺たちの世界でもテストがある。月一テストのことだ。デュエルのことだけでなく、普通の教科のテストも勿論有る。

とはいえ、元は高校三年生だった俺と由梨は普通教科では困ることは無い。そこそこの進学校に通ってたからな。

だから、俺と由梨は俺の部屋でまったりとした時間を過ごしている。

「王手。これで詰みだな」

「また負けたく。なんで勝てないんだろ」

デュエルもいいけど将棋もね。なんてこと言ったりしてな。とにかく平和な休日だ。

「よし、もっかい勝負！」

「望むところだ」

こうして、俺たちの休日は過ぎて行った。テスト当日。

筆記テストは終了した。最低80点はある筈だ。

で、俺と由梨、そして夜奈は実技試験の様子をゆっくりと眺めている。

「……ああ、D・D・クロウと弾圧使いたい」

「オネスト使いたいのんだけど……だめなんだろうなあ」

両隣にいる女子二人がガチ思考過ぎて怖いです。

クロウはともかく、オネストはマズいよ。絶対世界に悪い影響が出ちまう。

しかも、この世界は、そういうガチカードに対する風当たりが冷たいのだ。夜奈が弾圧使ってめちゃくちゃ反感買ったらしい。なんでもそんなカードは、相手への敬意が足りないとか言われたとか。

お、由梨の前にデュエルやる奴のデュエルが終わった。そろそろ由梨が出発する頃だな。「んじゃ、行って来まーす」

「ああ。頑張れよ、由梨」

「いいデュエルを頼むぞ」

俺は由梨に励ましの言葉を送った。

さて、俺も試合に向かうとしますかね。デュエルフィールドの近くまで来たんだが……。

「やつほゝ響弥。こっちこっち」

俺の試験があるデュエルフィールドに由梨がいたんだ。

確かデュエルアカデミアの実技試験は、同じ階級の奴とやるはずだよな。

「あゝ、多分十代とよくつるんでるから目を付けられたんじゃないかな？ 今回のこれは私がクロノス教諭に頼まれたしさ」

へえ。てか地の文に答えるのやめて欲しいぜ。

「ま、今回は由梨が相手ってことには変わらないんだろ？　なら問題ないさ」

「そうだね。それじゃ始めよっか！」

「おう！」

そういえば、由梨とデュエルするのも久しぶりだな。  
またあんなデュエルが出来るんだろうか。

「二人とも頑張れよー！」

十代達も俺達のデュエルを見てるみたいだな。こりゃ格好悪いとこ見せられないな。

「「デュエル！」」

響弥

LP／4000

手札／5

由梨

LP／4000

手札／5

先攻 由梨

「私のターン、ドロー！ 私は《フォトン・スラッシャー》を特殊召喚！ フォトン・スラッシャーは、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚できる！」

星4／光属性／戦士族／攻2100／守0

「さらに、《フォトン・クラッシャー》を通常召喚！」

星4／光属性／戦士族／攻2000／守0

「カードを1枚伏せて、ターン終了。さあ、このデュエルを楽しもうよ！」

由梨

LP／4000

手札／3

「ああ、楽しませて貰うぜ！ 俺のターン、ドロー！ 俺は《メンタル・プロテクター》を召喚！」

メンタル・プロテクター

星3／地属性／サイキック族／攻0／守2200

「さらに、速攻魔法《緊急テレポート》を発動！ デッキから《サイコジャンパー》を特殊召喚！」

サイコジャンパー

星2／地属性／サイキック族・チューナー／攻1000／守1500

「最初っから飛ばすねえ、響弥」

「出し惜しみは無し、だろ？ 俺はレベル3のメンタル・プロテクターにレベル2のサイコジャンパーをチューニング！

超常なる力を身に宿し生み出されし者よ。共に歩む仲間の力を魔力に変え、その心と我が身を癒せ！ シンクロ召喚！ 現れろ、《マジカルアンドロイド》！」

マジカルアンドロイド

星5／闇属性／サイキック族／攻2400／守1700

シンクロ召喚をすると観客が騒ぐ。間近で見る機会にまだ恵まれないから仕方ないか。

まあ、今回はもつと派手に騒ぐことになりそうだけだな。

「バトル。マジカルアンドロイドで、フォトン・スラッシャーを攻撃！ サイコ・マジック！」

「うっ……。やるね、響弥」

由梨

LP／4000↓3700

「俺はカードを1枚伏せて、エンドフェイズに移行だ。エンドフェイズに、マジカルアンドロイドの効果発動。自分フィールドに表側表示で存在するサイキック族モンスター1体につきライフを600回復する」

響弥

LP／4000↓4600

### 手札／3

「私のターン、ドロー！　へへ、今度はこっちの番だよ！　私は《フォトン・ケルベロス》を守備表示で召喚！」

フォトン・ケルベロス

星3／光属性／獣族／攻1300／守600

「フォトン・ケルベロスが召喚に成功したターン、このカードが表側表示で存在する限り、互いにトラップは発動できない。さらに私は、リバーズカード《フォトン・リード》を発動！　手札からレベル4以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！　《フォトン・サークラー》を特殊召喚！」

フォトン・サークラー

星4／光属性／魔法使い族／攻1000／守1000

「レベル4モンスターが2体、か」

「いくよ！　私はレベル4のフォトン・クラッシャーとフォトン・サークラーを、オーバーレイ！」

また観客が騒ぎ出す。自分の目で見たことの無い召喚方法に興奮を抑えられないって感じか。

「2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築！　エクスィーズ召喚！　現れろ、《NO・39　希望皇ホープ》！」

NO・39　希望皇ホープ

ランク4／光属性／戦士族／攻2500／守1500



ホープが現れた瞬間、会場が割れたかと思うほどの歓声が起こった。

まあ、シンクロ召喚とエクシーズ召喚が1つのデュエルで見れりやそうなるかね。まだまだシンクロもエクシーズも普及してるとは言えない。ここで見られるなんて誰も思わなかっただろうし。

『うひゃあ!』

俺のそばで寝ていたイリカが驚いて起きた。そもそも浮きながら寝るな。

「ホープか。こりゃ面倒だな」

「バトル! ホープでマジカルアンドロイドを攻撃! 必殺、ホープ拳クラッシュ!」

技名変わってる! 『けん』違いだそれは!

「チッ、トラップを封じられてるのはキツいな」

響弥

LP／4600↓4500

「カードを1枚伏せる。これでターン終了だよ」

由梨

LP／3700

手札／1

「俺のターン、ドロー！」

さて、どうしますかね。手札にはこの状況を覆すモンスターは無し。マジカルアンドロイドの退場が痛いな。

「俺はモンスターを裏守備表示でセット。カードを1枚伏せてターンエンド」

響弥

LP／4500

手札／2

「私のターン！ 私は《トラップ・スタン》を発動！ これでこのターン、またトラップは使えないよ」

「へっ、用意周到なことで」

「バトル！ ホープで伏せモンスターを攻撃！ ホープ拳クラッシュユ！」

「破壊されるのはカバリストだ。カバリストの効果発動。戦闘破壊されたとき、ライフを800払うことにより、デッキからサイキック族モンスター1体を手札に加える。俺は《クレボンス》を手札に加えるぞ」

響弥

LP／3700↓2900

「残念だけど、そのモンスターには帰って貰わなきゃね。私はフォトン・ケルベロスを生贄に、《フォトン・レオ》を召喚！」

フoton・レオ

星6／光属性／獣族／攻2100／守1100

「フoton・レオだと？」

「フoton・レオの効果発動！召喚に成功したとき、相手の手札を全てデッキに戻し、デッキをシャッフルする。その後、相手はデッキに戻した枚数分のカードをドロ―する。つまり、クレボンスには一旦デッキに戻って貰うよ！」

「チッ！俺の伏せたモンスターを読んでいたのかよ」

「まあね。ダテに18年一緒にいた訳じゃないよ」

こりゃ嬉しいやらマズいやら。手札はクレボンスを含めて3枚。クレボンスは痛い、他の2枚を変えられればまだいける。

ドロ―！よし、これならなんとかなりそうだ。

「私はカードを1枚伏せて、ターン終了だよ」

由梨

LP／3700

手札／2

「俺のターン！さあ、反撃といこうか！手札から《脳開発研究所》を発動！」

「うっ、響弥のホームグラウンド。この部屋苦手なんだよなあ」

「さらに永続トラップ《サイコ・チューン》を発動！ 墓地のサイキックモンスター1体を、チューナー扱いで特殊召喚する！ 墓地のメンタル・プロテクターを復活させる！ さらに、《アーマード・サイキッカー》を召喚！ アーマード・サイキッカーは自分フィールドにサイキック族モンスターが表側表示で存在する場合、生贄無しで召喚できる！」

アーマード・サイキッカー

星6／地属性／サイキック族／攻2200／守1800

「アーマード・サイキッカー……。っ、これで合計レベルが9！」

「ああ。レベル6のアーマード・サイキッカーに、レベル3のメンタル・プロテクターをチューニング！」

超常なる力を持つ者よ。いかなる厚き壁を、狂わぬ狙いで全て貫け！ シンクロ召喚！ 現れろ、《ハイパーサイコガンナー》！」

ハイパーサイコガンナー

星9／地属性／サイキック族／攻3000／守2500

「ハイパーサイコガンナー……か。凄いよ響弥。あのドローで、このモンスターを呼ぶカードをドローするなんてさ」

「はは。俺もこちらに来てからドロー力も上がったみたいだね」

「あゝあ。フォトン・レオの効果は結局失敗だったみたいだね」

「残念だったな。んじゃ、デュエルの続きだ。サイコ・チューンの効果で、俺は特殊召喚したメンタル・プロテクターのレベル×400ポイントのダメージを受ける。よって1200のダメージを受け

る」

響弥

LP／2900↓1700

「うーん、それデメリットだね。そんなに自信満々に言うことなのかな？」

「デメリットだからこそだ。テンション上げないとライフ減らすのはメンタル面でキツイのさ」

「な、なるほど……」

「んで、俺は脳開発研究所にカウンターを1つ置き、《サイコ・ワールド》を召喚！」

サイコ・ワールド

星4／地属性／サイキック族／攻1900／守1200

サイコカウンター 2

「さらに、サイコ・ワールドの効果発動。ライフを800ポイント払うことで、サイキック族モンスター1体の2回攻撃を可能にする。この効果発動に払うライフをサイコカウンターで代用する」

サイコカウンター 2

「バトルだ。ハイパーサイコガンナーで希望皇ホープを攻撃！バースト・サイコ・ブラスター！」

「希望皇ホープのモンスター効果発動！ オーバーレイユニットを1つ取り除くことで、相手モンスター1体の攻撃を無効にする！ ムーンバリアー！」

NO. 39 希望皇ホープ  
オーバーレイユニット 2↓1

「もう一度、ホープに攻撃！ バースト・サイコ・ブラスター第二打ア！」

「もう一度ホープの効果発動！ ムーンバリアー！」

NO. 39 希望皇ホープ  
オーバーレイユニット 1↓0

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

響弥

LP/1700  
手札/1

「私のターン！ ごめんね響弥。速攻魔法発動！サイクロン 研究所は破壊するよ！」

「なにっ!？」

「これで終わりだよ！」

「くっ、くそおおお！ ……なんてな」

「え？」

「サイクロンにチェーンし、トラップ発動！ 《レインボー・ライフ》！ 手札を1枚捨てることで、このターン受ける効果ダメージを無効にし、無効にしたダメージ分ライフを回復する！」

「レインボー・ライフなんて、前まで入れてなかった筈じゃ……」

「この前の夜奈とのデュエルでカウンターが4つ乗ったからさ。さすがに対策しとこうかなって思ったら、今回ピタリとハマった訳だ」

「く、迂闊だったな。やっぱり響弥は凄いよ」

響弥

LP／1700↓3700

「カードを1枚伏せてターン終了！ （伏せたのは《光子化》<sup>フォトナイズ</sup>。これで次の攻撃も凌げるはず。）」

由梨

LP／3700

手札／2

「俺のターン！ 悪いな由梨。このターンで終わりだ！ 《最古式念導》を発動！ その伏せカードを破壊する！」

響弥

LP／3700↓2700

「嘘っ！？ この状況でそれ引く！？」

「光子化か。危ないもの伏せてたな。サイコ・ワールドの効果発動！ ハイパーサイコガンナーの2回攻撃を可能にする！」

響弥

LP／2700↓1900

「バトル！ ハイパーサイコガンナー、希望皇ホープを攻撃！ オーバーレイユニットがないホープが攻撃対象になった時、ホープは破壊される！」

「くっ、ホープが！」

今更思うが、何故ホープに自壊効果がついたんだ？ 他の主人公のエースと比べて使いにくさが目立つよな。アニメのまま、NO・の効果消して出せば良かったのに。

「モンスターがバトルを行う前に破壊されたことにより、巻き戻しが発生！ フォトン・レオを攻撃！ バースト・サイコ・ブラスター！」

「うああ！」

由梨

LP／3700↓2800

「さあ、これで終わりだ！ プレイヤーへダイレクトアタック！ バースト・サイコ・ブラスター！」

「うああああっ！」



由梨

LP／2800↓－200

「へへっ。俺の勝ちだな」

「うー、これで101戦50勝51敗か。また負け越しちゃったなあ」

数えてたのかよ。つか100戦もしたっけ？

「んじゃ、部屋に戻るか。ほら、早くしろ！」

「へっ？　ちょ、ちよつと待ってよ響弥！」

俺は由梨の手を掴んで走る。

原因は俺の後を追いかける生徒達。入学試験の時にシンクロ召喚を初公開した後、他の受験生に一斉に追いかけられたのだ。珍しいシンクロ召喚を使った奴とデュエルがしたいなんて感じの奴がほとんどだった。

んで、入学してからしばらくの間は、おい、デュエルしろよ祭りだったのだ。あれはもうトラウマだ。日に三十人程相手にしなきゃ全員を納得させられなかったからな。

そして今回の由梨が使ったエクシーズ召喚。これは今日が初公開だ。そんなものを見せられたら、前より酷いおい、デュエルしろよ祭りが開催されるに違いない。

「騒ぎが落ち着くまで、俺の部屋で待機だ！　さあ、レッド寮まで走るぞ！」

俺は念力を自分達の後ろから押すように発生させる。これで、普通より遥かに早い速度で移動可能だ。

「うひゃあ！ 早い早い！ 酔う！ 酔っちゃうって！」

「ははっ、我慢しろ！」

「鬼いゝ！」

由梨の叫びを無視しながら、俺は走っていく。

こんなのも、平和って言うのか？ だとしたら、これも悪くないのかもな。 暗い空間の中に巨大なモニターがある部屋。

そのモニターを見ながら、男にも女にも見える人物は優しく微笑んだ。

「ふふ。変わりませんね、二人とも」

「入るわよ」

その部屋に、一人の少女が入って来た。少女は由梨よりも高く、響弥よりは低い背丈で、美しい青い髪を腰まで伸ばしている。

「おや、クイーン。珍しいですね。貴女がこの部屋に自ら来るとは」

「憎まれ口のつもりかしら、ジョーカー？ まあ、今日はキングが来られないって言ってたから、代わりに来ただけよ」

クイーンと呼ばれた少女は、顔をモニターに向けた。

「なかなか強いよね、彼ら。私と良い勝負ができるくらいはあるかしら」

「ふふ。もしかしたら、キングと張り合えるくらいはあるかもしれません」

「随分買ってるのね。アナタが人をそこまで評価するなんて、正直言って意外だわ」

そう言われたジョーカーは、どこか悲しげな目をした。

「……彼らは、私を必要としてくれましたから。その分甘くなっているのかもしれませんが」

「それより、少し拙いことになったのよ。奴らの動きが、この世界に向けて開始されたわ」

「この後起こるのは……廃寮事件、ですか」

「ええ。おそらく奴らは、あの事件に介入するつもりよ。どうする？　なんなら私が止めにいくけれど」

「いえ、ここは静観しましょう。下手に動けば、我々が奴らと勘違いされかねません」

「そう。分かったわ。他のメンバーには、私から伝えておくから」

それだけ言うと、クイーンは部屋を後にした。

「すみません、響弥。このように傍観する私を、軽蔑するのでしょうか。それでも構いません。私にはそれしかできないのですから…

」

ジョーカーの悲しい弦きは、誰にも聞かれることなく、暗い部屋に飲み込まれた。

## テストは普段の積み重ねが結果になる（後書き）

由梨「やつとデュエルできたあああ！」

響弥「お疲れさん。これで空気なんて言われる心配もないだろうな」

……フェニクスとチェインが欲しい。

響弥「いきなり何言ってたアンタ」

いや、今回の話、初期の奴を妹に見せたら酷評されて。

響弥「お前妹いたのか」

特にデュエル構成をボロクソに言われまして。少しブルーになってるんですよ。

由梨「それでさっきのフェニクスとチェインが欲しいって発言に繋がるわけだね」

まあ、へこんでちゃ駄目ですよ。

という訳で次回予告ですが。

響弥「俺達オリキャラの紹介だっけか」

由梨「夜奈ちゃんもでるよ！」

てなわけで、今回はオリキャラ紹介です。今回の話で誤字脱字、

その他指摘がありましたら遠慮なくどうぞ。感想を貰えると筆が早くなるかもです。それではまたお会いしましょう。

## **L e t ' s 人物紹介（前書き）**

今回は人物紹介です。短いですがどうぞ。  
※いろいろ修正しました。

## Let's 人物紹介

響弥 「はい、皆さんどうもこんにちは」

由梨 「こ、こんにちは」

夜奈 「いったいどうしたんだ？ それにこのパネルは……」

響弥 「今回はキャラ紹介だ。俺たち三人、オリキャラの設定をここで紹介しておこうということらしい」

由梨 「なるほど」

夜奈 「正直こんなことよりデュエルしたいんだが、仕方ないな」

由梨 「それじゃ最初は、響弥のプロフィール紹介からだね」

赤崎響弥

（あかさききょうや）

年齢 18

身長 180 cm

体重 58 kg

所属 デュエルアカデミア本校 オシリスレッド第一学年  
一人称 俺

好きなこと、もの

由梨の笑顔

糖分



嫌いなもの

人間的に終わっている奴

自分の仲間（特に由梨）を傷つける奴

身体的特徴

短めの茶髪

茶色の瞳

左目の下にある痣

性格・その他

クールキャラ志望のやや熱血型。感情が振り切れるとハイテンションになる。

現実世界出身。通っていた高校では生徒会長をしていた。

健康診断で毎回注意されるほどの甘党であり、小さな頃からお菓子を作り、持ち歩いていた。その見た目や味は、学園祭で売れば三百個が五分で完売するほど。

元の世界で遊戯王の世界大会に出場したこともあるが、本人曰わく、不思議な感覚を感じたのは由梨と夜奈だけ。

使用デッキは【サイキック族】。エースモンスターは《メンタルスフィア・デーモン》。

精霊としてイリカがついており、イリカに与えられた念力を自由に操る力を持つ。

異名 サイキッカー 奇跡を呼ぶ超能力者

夜奈「好きなもの、由梨の笑顔……」

由梨「なかなか照れちゃうね」

響弥「それよりも、最後の異名ってなんだよ。初耳なんですけど」

夜奈「あたしが足したんだ。どうだ。格好いいだろう？」

由梨「ちょっと痛々しいね」

響弥「できれば撤回して頂きたいよ俺は」

夜奈「まあ良いじゃないか。由梨にも付けてあるんだし」

由梨「え、マジですか!？」

響弥「なら、続いて由梨の奴を見てみよう」

鹿野川由梨

(かのかわゆうり)

年齢 18

身長 165cm

体重 禁則事項です♪

所属 デュエルアカデミア本校 オベリスクブルー 第一学年

一人称 私

好きなこと、もの

響弥のお菓子

睡眠

身体を鍛えること

嫌いなこと、もの

雨

響弥に危害を加える人

身体的特徴

赤い瞳

白いセミロングの髪

性格・その他

明るくマイペース。良くも悪くも純粹。怒ると怖い（響弥談）  
現実世界出身。響弥と同じ高校で生徒会副会長をしていた。原作漫画から遊戯王にハマり、デュエルモンスターズにもどつぷりとハマった。

生まれつき力が強く、同年代の子供や親との関係が上手く行っていなかった為、孤立し、いじめにも遭った。響弥と響弥の家族はその頃からの心と身体の支え。特に響弥への依存度が高く、彼が居るからこそ自分だと思っている。

デッキコンセプトは【エクシーズ召喚】。

エースモンスターは《ヴァイロン・デिशグマ》。

異名 奇跡を呼ぶ星を重ねし者

スタープレイヤー

夜奈 「好きなもの、響弥のお菓子……」

響弥 「おいおい。さすがにありや恥ずかしいぜ」

由梨 「いいんだよう。だって本当のことなんだもん！」

夜奈 「……イチャついてんじゃねえよ！」

響・由 「え、イチャついてないよ？」

夜奈 「チッ！ まさか二人とも無自覚かよ！？」

由梨「夜奈ちゃん、やけにテンション高いね」

響弥「さあ、次は夜奈のプロフィールだ」

天斗夜奈

（あまとやな）

年齢 18

身長 150cm

体重 この項目はブラック・ハリケーンされました

所属 デュエルアカデミア本校 オベリスクブルー 第一学年

一人称 あたし

好きなこと、もの

カラス

クロウ・ホーガン

格好いいもの

嫌いなこと、もの

人を差別する奴

キラキラ光るもの

身体的特徴

黒髪ポニーテール

黒い瞳

性格・その他

喧嘩っ早いが人懐っこく、友達思い。頼られると断れない。

現実世界出身。響弥達が通っていた高校の同級生だった。アニメ遊戯王5D'sのクロウ・ホーガンの大ファン。クロウや響弥、由梨に強い憧れを抱いたことで明るく活発になった。前元気が空回り気味の少女だった。GXの世界に来た経緯は不明。

使用デッキは【BF】。勿論、クロウの影響である。エースモンスターは《BF―アーマード・ウイング》。

異名 黒翼の暴風

由梨「夜奈ちゃん、私達の同級生だったんだ」

夜奈「ああ。二人はあたしの憧れだったんだぞ。あんな風に全校生徒の前で話してみたいと、何度夢見たことか」

響弥「なるほど。それならあの時、夜奈が俺の顔を知っていたことも合点がいくな。何度か生徒の前で話したときに、顔を覚えてたわけか」

夜奈「そういうことさ。さて、今回はこのあたりで終了か」

「ちょっとまったああ！」

夜奈「っ！ 誰だお前は！」

イリカ「みんなのアイドル、イリカちゃんですよ！ あなたとは初めましてですよ！ よろしくです！」

響弥「こいつが俺の紹介の最後に書いてあった精霊、イリカだ。俺達がこの世界に来るきっかけというか、原因を作った奴だ」

由梨「良くも悪くも、この子がいなくてこの物語は始まってないわけだよ」

夜奈「ほう、つまりこの物語のカギを握っているということか」

イリカ「そうなのです。みんな私を崇めるがいいのです!」

響弥「調子のんな阿呆が。お前の紹介をするんだ、少しは自重しろ。んじゃ、イリカのプロフィールをどうぞ」イリカ  
(いりか)

年齢・身長・体重 精霊には秘密が多いのですよー

所属 赤崎響弥及び鹿野川由梨

一人称 私

好きなこと・もの

楽しいこと

実体化

響弥のお菓子

嫌いなこと・もの

つまらないこと

精霊世界を悪用しようとする人間

身体的特徴

サイ・ガールと同じ

性格・その他

天真爛漫かつマイペース

響弥と由梨を現在居る世界に呼んだカードの精霊  
精霊世界ではサイキック族の伝達役だった

現在の世界に到着後、自身が宿ったカードを持つ響弥、及び自身が連れてきた由梨をマスターとして仕えている

精霊の力によって、マスターに特殊能力を与えることが可能

「～です」が口癖

デッキを持っているかは不明

響弥「以上だ。特にコメントは無い」

由梨「今回はこれで終わり？　いつもより短いね」

夜奈「作者もいろいろ忙しい、と言いつてしていたからな」

由梨「言いつて言っちゃうんだね……」

響弥「ヤツが居ないから言いたい放題だ。好きに言ってやればいいさ」

イリカ「あ。今後もオリキャラが増えたり、変更があったりしたら、人物紹介part2、みたいなこともあるかもです！」

響弥「んじゃ、今回はこの辺でお開きだ。今回のお相手は赤崎響弥と」

由梨「鹿野川由梨と！」

夜奈「天斗夜奈と」

イリカ「イリカちゃんでした～。それでは皆様、またお会いしましょうです」

## **L e t ' s 人物紹介（後書き）**

今年中にもう一回更新、できればなあ……



## もう一つの影（前書き）

恐らく今年最後の更新です。今回も短いですがどうぞ。

## もう一つの影

夏の風物詩、というと、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。

スイカやかき氷という食べ物を思う人もいれば、金魚すくいや射的といったお祭りを思う人もいるだろう。

そんな夏の風物詩の中に、肝試しというものがある。文字通り人間の肝、つまり度胸を試す行為だ。お化け屋敷や怪談話なんかも、肝試しにはよく用いられる。

さて。なぜ俺がこんなことを言ったかというと、今現在、俺が怪談話をしている最中だからだ。

「さあ、次は響弥の番だぜ！」

「響弥くん、なるべく優しいのをお願いするッス」

「俺も優しい話がいいんだなあ」

現在地はレッド寮の食堂。メンバーは俺、十代、翔。そして同じ寮の前田隼人の4人。カードの山の上から一番上をめくり、そのモンスターレベル相当の怖い話やゾツとする話をしていくというものだ。

既に俺以外のメンバーは話を終えている。なので、次は俺が話をする番だ。

「よし、じゃあめくるぞ。……《マスター・ジグ》か。レベルは8だな」

「どんな話をしてくれるんだ？　ワクワクするぜ！」

ワクワクしてちゃ肝試しの意味ないと思うぞ、十代。それほど肝が座ってるのか。

「んじゃ、始めるぞ。」

これは俺が同じ中学の奴に聞いた話なんだがな。かつて、女の子2人と同時に付き合っていた1人の男性がいたんだ」

「羨ましい奴ッスね」

「そのことを女性は2人とも知っていた。つまり、了承が得られていたんだ」

「凄い状況なんだな」

「そんな男が、ある日突然、自分に恨みがあるという女性によって、殺されてしまった」

「ええ!？ 何が起きたんだよ!」

「薄れゆく意識の中で男性が最後に聞いたのは、女性の呟くように言った『私だけを死んでも愛し続けるって、言いたくせに……』という言葉だった」

「そ、それって……」

「男を殺した女は、かつて男が前世で永遠の愛を誓った女だった。生まれ変わって他の女を愛した男のことを、その女は許せずに、殺すために女は追いかけてきたんだ……」

「ひいっ!」

「そ、それは怖いんだな……」

「殺されちまうのは、さすがに怖かったぜ……」

三者三様の反応を見せる十代達。十代は頑張れよ。ユベルは危ないぜ？

「さてと。全員終わったし、俺は帰るぞ。ちっと寝不足なんだ」

「おう。じゃあな！」

「おやすみ」

俺は食堂を後にした。「廃寮に探検に行くだど？」

次の日、授業を終えた俺は十代達と話していた。

なんでも、あの後レッド寮の担当教員である大徳寺先生が廃寮のことを話したという。

それに興味が湧いた十代が、廃寮を探検しに行くと言い出したのだ。

「おう！ 響弥も行かないか？」

「面白そうだな。ついて行かせてもらうよ。あ、由梨と夜奈も呼んで良いか？」

「勿論だぜ！ それじゃ、また後でな！」

「ああ。じゃあな十代」

十代と別れ、自分の部屋に入る。  
とりあえず、由梨に連絡しとくか。

「よっす由梨。今日はなんの日かわかるか？」

『勿論ですよ響弥さん。いよいよタイタンとのご対面ですよ！』

いつになくテンションが高い由梨。さすがタイタンファンクラブの会長だ。

「んじゃ、午前0時に廃寮前で待ち合わせだ。夜奈も呼んどいてくれ」

『了解です！ そいじゃね〜！』

電話を切られた。終始テンションがおかしかったな。でもそこが由梨の可愛いところ……だよな？

『いや、誰に聞いてるんですか』

「おやイリカ。いつの間に？」

『さっきの電話の初めから居たのです』

「気づかなかったよ。あ、俺はこれから寝るから、午後11時に起こしてくれ。今日は夜更かししなきゃいけないから」

『わかりました〜』

俺は布団に潜り込んですぐに、眠りに落ちた。タイタン楽しみだ

なあ。はい。時と場所は移り、廃寮の前に来ています。

既に十代達は中に入っている。もう十分は経ったはずだ。なぜ十代達と別れているかと言えば、

「ごめん響弥。寝過ぎしちゃった！」

例の如く寝坊助幼馴染みさんの所為なのだが。

「また目覚ましが逝ったか」

「うう、申し訳ない……」

しょぼんとする由梨。散っていった戦友（目覚まし時計）との別れを惜しみながら、俺は由梨の頭を撫でた。

「ほれ、十代達はもう中に入ったぞ。俺達も行こうぜ。生のタイタンを見るんだろ？」

「……うん。そうだね。ありがと、響弥」

そう言って俺に笑顔を向ける由梨。

その笑顔を見て、俺は心の中で満足していた。

「よし。それじゃあ……って、夜奈はどうした？」

「あ……夜奈ちゃんは残念ながらお休み。お風呂で寝ちゃって、風邪ひいてるんだ」

むう、残念だな。夜奈もタイタンの声の良さがわかる奴だと思ってたんだが。

「なら、仕方ないな。それじゃ改めて、廃寮に突入だ」

「おー！」

俺と由梨は意気揚々と廃寮に乗り込んだ。

「んで、もう二人はあの中か」

「そうッス！ 中が見られないから、アニキがどうなってるか心配で……」

俺達が到着した時には、既に黒い球体が出現していた。

どうにかあの闇を打ち払いたいな。何よりタイタンに会いたいし。

「由梨、いけるか？」

「うーん。とりあえずやってみるけど」

そう言うのと由梨は黒い球体に近づいていった。

そして。

「ちえいっさー！」

掛け声と共に、黒い球体に蹴りを入れた。

すると、黒い球体にヒビが入り、そこから碎けていった。

「す、凄いッス……」

「普通じゃ真似できないんだなあ……」

由梨の荒技に唾然とする翔と隼人。うん、真似なんかできる訳ないよ。

「な、なんだ！？　いきなり黒い空間が砕けたぞ！？」

十代も驚いている。そりゃ自分が居た空間が砕けたらビビるよな。

「やっほー十代。お久しぶりー」

「由梨！　響弥も来てくれたんだな！」

「ああ。それより、怪我は無いか？　あの中にいたら闇のゲームになっちまうからな。ダメージが現実のものになる」

「そこまでヤバい空間だったのかよ……。ダメージ受けなくて良かったぜ。ありがとな、ユベル」

十代がそう言うと、半透明のユベルが

『べ、別に十代の為じゃないんだからねっ！　十代が怪我したらボクが困るから助けてあげただけなんだからねっ！』

と言ってそっぽを向いてしまった。

ユベルの力で衝撃を消してたんだろうな。  
それにしても、だ。

「ユベル、ツンデレだったんだ……」



「ん？ ツンデレってなんだ？」

俺は頭の上にクエスチョンマークを浮かべる十代をあしらい、倒れているタイタンの方へと向かった。

「チッ、まだ力を使いこなせていないか。だが、今度は失敗しない……」

やけに低い、聞き慣れた声が聞こえた。

次の瞬間、タイタンが倒れていた場所が黒い靄もやに包まれた。

『この感じ……マズいです！ 強力な闇の力を感じます！』

イリカが慌てながら出てきた。

俺は由梨を自分の近くに寄せ、イリカに詳しい事情を聞いた。

「闇の力？ どういうことだ？」

『以前話した、世界を歪める軍団が持つ力です。闇のエネルギーを利用して、その世界の人間を消し去ってしまうんです』 「それって、あのままじゃタイタンが消えちゃうってこと？」

『はい、恐らくは。助けるには、早くあの闇を消さなきゃです！』

イリカの話を聞いて、俺は念力の出力を少し上げる。

「要はあの闇を吹き飛ばせばいいんだろ？ だったら」

タイタンを包む黒い靄に念力を向かわせ、靄に触れた瞬間、靄を

思いっきり弾いた。

「こうすりゃ良いワケだ」

弾いた靄を一カ所に集め、念力で押し潰す。これで靄は完全に消えた。

あの靄の出所は……、あの奥か。

「由梨と十代は、明日香とタイタンの確保を頼む。俺はこの奥に向かう。行くぞイリカ!」

「へ!？　ち、ちょっと待ってよ響弥!」

俺は由梨の返事を待たず、奥の部屋への扉を開けた。

「……もぬけの殻、か」

俺が部屋に入った時には、もうなんの痕跡も残っていなかった。

『でも、この部屋から闇が出ていたことは確かです。そして、次元を歪める軍団が動いていることも』

「ああ。この廃寮に本来存在しない人物が居たのは、間違いなさそうだな。でもまあ、今回は怪我人が出なくて良かったな」

『そうですね』

俺は由梨達と合流し、廃寮を出た。

タイタンは保健室の前に置いた。

気絶してただけみたいだし、大丈夫だろう。

そして、レッド寮の俺の部屋にて、十代への事情説明を行った。  
この世界を狙う連中が居ること。

俺や由梨はそれを止める為に異世界から来たこと。

俺には特殊な力があること。

それらを話しても、十代は俺達を信じてくれた。なぜかを聞いたら

「だって、響弥や由梨が言うんならそうなんだろう？ オレは、二人を信じるぜ！ それに、オレにもユベルが居るんだ。変わった話には慣れてるしな！」

だってさ。ほんと、凄い奴だよな。

俺達の事を信じてくれた十代に感謝しながら、俺達は解散した。

あ、廃寮に行ったから、制裁デュエルやらないといけないのか。  
面倒だな……。

## もう一つの影（後書き）

響弥「まさかのデュエル無しか。今年最後の更新がこれかよ」

考えているストーリーがありますから。

響弥「へえ……。アンタがそんなこと考えてたのか。驚いたぞ」

ひどい言い方ですね。仮にも私は作者ですよ？ それくらい考えてますよ。

響弥「やっと作者らしくなったな。1ヶ月でようやくか」

えへへ。

響弥「照れてんじゃねえ気持ち悪い。身体の内からぐっちゃぐちゃに潰すぞ？」

今回は退学を賭けた戦いですよ。来年も頑張ってくださいね。

響弥「言うまでもねえ。俺はいつだって、勝利への道突っ走るだけだからな」

それでは皆様、良いお年を。

## 原作キャラは大抵チートドロ持ち（前書き）

明けましておめでとうございます。

今年もこの駄文をよろしく願います。

それでは制裁デュエルの回です。どうぞ。

## 原作キャラは大抵チートドロ持ち

どうも、赤崎響弥だ。

今、俺、十代、翔の三人は、廃寮に入ったことによって退学を言い渡されていた。

そして十代達がやいやい言っても、クロノス教諭がそれを一蹴する。

うん、想定通りの展開ですよ。

さあ、お喋りフェイズの始まりだ。

「退学、ねえ……。いまいち納得いきませんね。なぜ廃寮に侵入しただけで俺達が退学にならにやなんのですかい？」

しかも今回、十代は軽少とはいえ怪我を負っている。さらに俺達だけじゃなく、明日香や由梨だって廃寮に入ってたんですぜ？

こんなところでまで、レッドは差別されるんですかい、クロノス教諭？」

「な、なぜそこで私に話を振るんデスーノ？」

「しらばっくれちゃあいけませんぜ。あのタイタンとか言う手品師さんから、ぜくんぶ聞いたんですよ。

クロノス教諭が闇のデュエリストを自称していたあの手品師に依頼して、十代を怪我させようとしたのをね」

「ギ、ギクリンチョ！」

「クロノス先生、それは本当ですか！？」

「校長、ここに手品師さんのお話の様子が録画されたビデオテープがあります。これを見ればすぐに真実がわかりますよ」

「ム、ムムウ……」

悔しそうにするクロノス教諭。苦虫を噛み潰す、ってこういう顔を言うんだろな。

「これをネットに撒けば、アカデミアの評判はガタ落ちでしょうねえ。気に入らない生徒を追いつぎに、部外者を呼ぶような教師が居る学校なんて、行きたくなるでしょう。ねえ、校長？」

「そ、それはそうですが。査問委員会では既に退学といった処理を出しています。なんのお咎め無しでは……」

「まあ、廃寮に入ったことは悪いと思います。ここはデュエルアカデミア。プロデュエリスト養成学校らしく、デュエルで罰を与えてみればいいんじゃないですか？

そうですね。制裁デュエル、とでも名付けましょうか。

どこから強いデュエリストを連れてきて、俺達とデュエルをさせる。俺達が勝てば、今回の事件はお咎め無し。ビデオテープは俺が保管します。負ければ俺達が退学する。ビデオテープはお渡ししましょう。どうでしょうか校長？」

「それなら、大丈夫でしょう。良いですよ、クロノス先生？」

「し、仕方ないノーネ。それデーハ、シニョール十代アンドシニョール丸藤でタッグを組み、シニョール赤崎には、1人でデュエルして貰うことにするノーネ。因みにシニョール赤崎には、制裁デュエルでのシンクロ、エクシーズの使用は禁止シマース」

……なんだと？

「これは制裁デュエル。これくらいのペナルティは必要ナノーネ」  
ほう。シンクロを封じれば俺が手も足も出ないとも思ってるのか？ 俺も舐められたもんだな。

「俺はその条件で構わない。十代、翔。お前たちはどうだ？」

「オレは構わないぜ」

「僕も大丈夫だよ。でも、響弥くんが……」

「心配は要らん。俺は勝つ。これで失礼するぞ」

俺はそう言い残し、校長室を後にした。

「えー、なんだかんだありまして、制裁デュエルを受けることになりました。てな訳で、応援よろしくな」

「もちろんだよ。頑張ってね、響弥」

「負けたら許さないぞ。ライバルに去られては困るからな」

「わかってるよ。負けるわけにはいかないさ。さて。俺の必勝祈願  
ってことで、チョコレートアイスでもどうだ？」

「やった！ 久しぶりの響弥のお菓子だ〜！」



「やれやれ。リラックスしているのか、緊張感が無いのか……」

と、いった感じにゆる〜く時は過ぎ、いよいよ制裁デュエルの日。その間に十代がカイザーとデュエルしたり、隼人が退学を賭けて親父さんとデュエルしたりと、順調に原作イベントを消化していた。

まあ、俺や由梨、夜奈はその光景を眺めていただけだが。現在は十代&翔が迷宮兄弟とデュエル中。一巡したくらいだな。

話は変わるが、現在俺の右隣には由梨が、左隣には夜奈がいる。俺も男だ。両手に花なこの状況、あまり嫌なわけではない。でもそれは、花が綺麗に咲いていればこそである。

左隣に咲いている花、夜奈の調子がどうも良くないらしい。目の下に隈を作ってしまったている。

「なあ夜奈。その隈、どうしたんだよ。寝不足か？」

すると夜奈は、いつもより覇気の無い声で答える。

「ああ。響弥が退学になってしまうのではないか、と思うとな。寝ようとしても寝れなかったんだ」

「おいおい。まさか俺を心配してたってのか？」

おどけて返してみると、夜奈は少し怒気の籠もった声で答えた。

「心配するに決まっているだろう！ お前のことを信じていない訳ではないが、やはり心配にはなるものなんだ。負けたら承知しない

からな」

「それは無用な心配だぜ、夜奈。俺はこのような所で退場する気なんか無い。たとえシンクロを封じられようともな」

「それなら、いいん、だが……」

そう言うと、夜奈は眠ってしまった。

心配してくれる人だっているんだ。負けるわけにはいかないんだよな。

お、十代達が勝ったか。次は俺達の番だな。

「よし。いってくるぞ、由梨」

「ふえっ?」

俺手作りのシュークリームを頬張り、両手にシュークリームを1つずつ持ち、ほっぺたにクリームを付けた状態で、こちらを向く由梨。食べてくれるのは嬉しいんだけどな。食いしん坊にしか見えん。

「俺の出番だ。応援頼むぜ」

「ふぁーい」

口をもぐもぐさせている由梨を後に、俺はデュエルリングへと向かった。

「それデューハ、赤崎響弥の制裁デュエルを始めるノーネ! 相手を

するのは、……このワタクシデスーノ！」

うっそーん。まさかのクロノス教諭かよ。直接潰しに来たのか？  
あー、なんか他の生徒が終わった、とか可哀想に、とか言ってる  
な。

「響弥ー！ 負けるなよー！」

「頑張れ、響弥ー！」

上から十代、由梨。夜奈はまだ寝てるみたいだな。  
負けたくねえな。負ける訳にはいかねえな。

「よろしくお願いしますよ、クロノス教諭。まあ、負ける気はありませんがね」

「フフン。今にその生意気な口を閉じることになるノーネ！」

「「デュエル！」」

響弥

LP／4000

手札／5

クロノス

LP／4000

手札／5

「せめてもの情けナノーネ。先攻は譲ってあげるノーネ」

「じゃあ、遠慮なく。俺のターン！」

よし、手札は悪くない。

『イリカ。今回はお前にも出てもらうぞ』

『ふえっ？ わ、わかったです！』

「俺は《サイキック・ブロッカー》を守備表示で召喚。さらに、速攻魔法《緊急レポート》を発動。デッキから《サイ・ガール》を特殊召喚」

サイキック・ブロッカー

星4／風属性／サイキック族／攻1200／守300

サイ・ガール

星2／地属性／サイキック族・チューナー／攻500／守300

「フン。チューナーモンスター、ナノーネ。でも、シンクロは禁止しているノーネ」

したり顔で言うクロノス。やっぱりこの頃のこいつは好きになれん。万丈目と同じだな。

「誰がシンクロをすると言った。チューナーにはシンクロしか用途が無いと思わないことだ。魔法カード《サイキック・インパルス》を発動。自分フィールドのサイキック族モンスター1体を生贄にして発動。相手の手札を全てデッキに戻し、シャッフルする。その後、相手はカードを3枚ドロースる。サイ・ガールを生贄にして発動する。さあ、手札を変えて貰おうか」

『ゴメンな、イリカ。こんな使い方になっちまって』

『大丈夫なのです。でもお腹が空いてるので、後でチョコレートパフェが食べたいのです』

『ははは。ちゃっかりしてるな』

「さらに、サイキック・ブロッカーの効果発動。カード名を1つ宣言することで、次の相手のエンドフェイズまで宣言したカードをプレイできない。俺は、《古代の機械巨人》アンティーク・ギアゴレムを宣言する」

「ムウウ。厄介なモンスターナノーネ」

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

響弥

LP／4000

手札／2

「ワタクシのターン！ ドローニョ！」

「アンタの十八番は封じてある。さあ、どう出る？ 実技最高責任者。」

「ムフフ。ワタクシには古代の機械巨人しか無いと、思わないことナノーネ。ワタクシは《トロイホース》を召カーン！ さらに、マジックカード《二重召喚》デュアルサモンを発動するノーネ！ これでこのターン、ワタクシはもう1度通常召喚ができるノーネ」

トロイホース

星4／地属性／獣族／攻1600／守1200

「トロイホースは、地属性モンスターの生贄にする場合、2体の生贄にできるノーネ。トロイホースを生贄に、《古代の機械巨竜》を召喚スルー！」

アンティーク・ギアガジェルドラゴン  
古代の機械巨竜

星8／地属性／機械族／攻3000／守2000

……なるほど。そっちも持ってたか。

「お、おい！ あれはなんだよ！」

「まさか、あれがクロノス教諭のもう1つの切り札！」

「暗黒の中世デッキを守る、伝説のドラゴン！」

生徒達は大騒ぎだな。とんでもない盛り上がりだ。  
それほどまでにクロノスが出した機械巨竜が珍しいのか。

「まさかアナタのようなドロップアウトボーイに、このカードを使うとは思わなかったノーネ。でも、このカードを出したからには、ワタクシは負けないノーネ」

へえ。魂のカードってことかな？

やっぱりクロノスもデュエリストなんだな。

「さあ、バトルナノーネ。サイキック・ブロッカーを攻撃！」

「……通す」

「これで次のターンからは、古代の機械巨人が出せるノーネ。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

クロノス

LP／4000

手札／0

「俺のターン！」

ふう。ここはどうにか凌ぐしか無いな。

「《クレボンス》を召喚。ターンエンドだ」

クレボンス

星2／闇属性／サイキック族／攻1200／守400

響弥

LP／4000

手札／2

「ワタクシのターン！　ワタクシは装備魔法《古代の機械戦車》アンティーク・ギアタンクを発動！　ガジェルドラゴンに装備するノーネ。このカードを装備したアンティーク・ギアモンスターは、攻撃力が600ポイントアップスルー！」

古代の機械巨竜

ATK／3000↓3600

「バトルナノーネ。クレボンスを攻撃スルーノ！」

「クレボンスの効果発動。ライフを800ポイント払い、攻撃は無効だ」

響弥

LP／4000↓3200

「フフン。守ることしかできないようナノーネ。ターンエンド」

クロノス

LP／4000

手札／0

「俺のターン！」

パーツは揃いつつある。だがまだ耐えるべきだな。

「ターンエンドだ」

響弥

LP／3200

手札／3

「おいおい、なんだよあいつ！」



「手が出ないならサレンダーしろー!」

「つまんねえデュエルしてんじゃねえぞ!」

外野がうるさいなな。もう少し落ち着けばいいだろうに。

「ニヨホホ。散々な言われようナノーネ。ワタクシのターン!」

露骨だな、クロノス。口に出てるぞ。

「《古代の機械兵士》を召カーン!」

アンティーク・ギアソルジャー  
古代の機械兵士

星4／地属性／機械族／攻1300／守1300

「バトル。2体のモンスターで攻撃ナノーネ!」

「クレボンスの効果発動。2回ともバトルは無効だ」

響弥

LP／3200↓2400↓1600

「ターンエンドナノーネ」

クロノス

LP／4000

手札／0

「ムフフ。今ならサレンダーも認めるノーネ。どうスルーノ？」

「愚問だな。しないに決まっている」

「ムムウ！ 生意気な奴ナノーネ！」

「俺のターン！」

あと一歩。あと一歩だな。

「トラップカード《サイコ・ヒーリング》。自分フィールドに表側表示で存在するサイキック族モンスター1体につき、ライフを1000ポイント回復する」

響弥

LP／1600↓2600

「さらに、永続魔法《一族の結束》を発動。自分の墓地のモンスターの種族が1種類のみの場合、自分フィールドに存在するその種族のモンスターは、攻撃力が800ポイントアップする」

クレボンス

ATK／1200↓2000

「バトルだ。古代の機械兵士を攻撃」

「ムウウ。こんなもの、大したこと無いノーネ！」

クロノス

LP／4000↓3300

「これで俺はターンエンドだ」

響弥

LP／2600

手札／3

「ワタクシのターン！ ムフフ。《強欲な壺》を発動！ デッキからカードを2枚ドロースルーノ！」

ここで壺かよ。原作キャラは大抵壺引けるんだよな。俺なんかまだ実戦で壺引いたの、夜奈とやった時だけだぞ？

「これで勝負は決まるノーネ。ギア・タウン《齒車街》を発動！ さらに、アンティーク・ギアガジェルクメラ街の効果で生贄を軽減し、《古代の機械合成獣》を召喚スルーノ！」

アンティーク・ギアガジェルクメラ  
古代の機械合成獣

星6／地属性／機械族／攻2300／守1300

チッ。こりゃマズいかもしれないな。

「バトルナノーネ！ 2体のモンスターで、クレボンスを攻撃スルーノ！」

「クレボンスの効果発動だ。2体とも、攻撃は止めさせて貰うぞ」

響弥

LP／2600↓1800↓1000

「小賢しいノーネ！ ターンエンド！」

クロノス

LP／3300

手札／0

次のドローだ。次のドローで、勝負は決まるな。

「俺の、ターン！」

……まだか。だが、次で見えるはずだ。

「諦めたらどうナノーネ？ ワタクシの場には、攻撃力2000以上のモンスターが2体も居るノーネ」

「それは敗北フラグですよ、教諭！ 俺も《強欲な壺》を発動！ カードを2枚ドローする！」

……フツ。

「これで見えたぜ。勝利への道が！ サイキック・ブレイク 永続魔法を発動。さらに、クレボンスを生贄に、《サイコ・エンペラー》を召喚！」

サイコ・エンペラー

星6／光属性／サイキック族／攻2400／守1000

ATK／2400↓3200

「サイコ・エンペラーの効果。召喚・特殊召喚に成功した時、墓地のサイキック族モンスター1体につき、ライフを500ポイント回復する。墓地のサイキック族モンスターは3体。ライフを1500ポイント回復する！さらに、サイキックブレイクの効果発動！サイキック族モンスターの召喚に成功した時、ライフを500ポイント払うことで、そのモンスターのレベルを1つ上げ、攻撃力を300ポイントアップする！」

響弥

LP／1000↓500↓2000

サイコ・エンペラーATK／3200↓3500

「さらに、<sup>サイコ・ソード</sup>装備魔法をサイコ・エンペラーに装備！自分のライフが相手のライフを下回っている場合、装備したモンスターの攻撃力は、ライフの差分アップする！」

サイコ・エンペラー

ATK／3500↓5200

「こ、攻撃力5200デースト！？で、ですが、ギアガジェルキメラを攻撃しても、ライフは100残るノーネ！」

「それが残らないんですよ！バトル！サイコ・エンペラーで、ギアガジェルキメラを攻撃！そして、<sup>イージューニング</sup>速攻魔法発動！墓地のチューナーを1体除外して発動！自分フィールドのモンスター1体の攻撃力は、発動時に除外したモンスターの攻撃力分アップする！サイ・ガールを除外して、攻撃力をサイ・ガールの攻撃力分、800ポイントアップする！」

『いくぞ、イリカ!』

『はいです!』

サイコ・エンペラー

ATK／5200↓6000

「こ、攻撃力6000デースト!?!」

「やれ、サイコ・エンペラー! マジック・エンペラー・ショック  
!」

「ペッペロンチーノオオオ!」

クロノス

LP／3300↓400

「ワ、ワタクシがドロップアウトボーイに2度も負けるナンーテ…  
…」

「これで、俺の退学は無しですよ。それでは」

俺はそれだけ言い残し、観客席へと向かった。

「やったな、響弥! 凄いデュエルだったぜ!」

「かっこよかったよ、響弥!」

「流石だな、響弥。見事なデュエルだったぞ」

上から十代、由梨、夜奈。夜奈、起きてたんだな。あと、祝ってくれるのはありがたいが、人前ではやめてくれ、由梨。他の生徒からの視線が痛い。

「ああ、ありがとうみんな。んじゃ、俺は帰るよ。十代達も早く帰れよ」

そう言い残し、俺はさっさと撤退した。

何故かって？

原作だと、十代達が何か言ってレポート書かされてたからな。事前に避難したのさ。

まあ、十代達が帰って来たら、祝勝会でもやろうかな。

## 原作キャラは大抵チートドロ持ち（後書き）

今回は制裁デュエルの回でしたが。

響弥「なぜタッグデュエルじゃなかったんだ？ 由梨でも夜奈でも、組む相手はいるだろう」

タッグデュエル、めんどぐはあつ！

響弥「まずはそのふざけた根性をぶち殺す！」

ぶったぐふうっ！ 二度もぶった！ 親父にもぶたれぐへあつ！？

響弥「フン。貴様は今年も相変わらずのようだな」

せめて最後まで言わせて！ でも、そのおかげでクロノスとデュエルできたんですよ。これで冬休みに入れますね。

響弥「……は？」

という訳で、次回から冬休み編です。お楽しみに。あ、誤字や間違いの指摘、感想等は感想欄にどんどんお願いします。それでは。



**冬休み 砂糖と塩？ 砂糖の方が好きですが？（前書き）**

どうもです。

いつも以上の駄文ですが、どうか見捨てないで……

**冬休み 砂糖と塩？ 砂糖の方が好きですが？**

午後四時

皆さんどうも。赤崎響弥だ。

突然だが俺は今、今日の夜のクリスマスパーティーにむけて本土の家でケーキを作っている。

え？ 端折りすぎ？

だって、制裁デュエルから後のイベント、俺が絡む余地が無かったんだよ。

SALとか三沢とか色々あったが、どれも俺は関わっていない。まあ、今まで介入しまくってたからしばらく大人しくしようってことになったんだよ。色々保たなかったんだ。主に体力面で。原作キャラみんな元気過ぎるだろう。

んで、迎えた冬休み。

俺や由梨には本土にイリカが用意してくれた家があるので、本土に戻ることにした。クリスマスや正月くらい、学校以外で迎えたいしな。そして、一番最初の光景に戻るという訳だ。

「響弥がクリスマスケーキ作ってくれるのも、定番になったね」

リビングの椅子に座った由梨が言う。

確かにそうだ。ケーキを作れるようになったのは小六だったか。その頃からだから、もう六年になるな。

「まあ、美味しいって食べてくれる人がいるからさ。作り甲斐があるんだよ」

「えへへ。だって美味しいんだもん。響弥のケーキ食べたら、他

のお店のケーキ食べられなくなっちゃうよ」

「はは。恐れ多いことだ」

……やっぱり、由梨と居るのは楽しいな。あんなことがあっても、ずっと一緒だったからかもな。

「あ、私ちょっとイリカと散歩に行ってくるね」  
『行ってくるです』

「ん？ ああ、わかった。行ってらっしゃい」

ふむ。まあ、夜まで時間はあるし別にいいか。  
俺は俺で、ちよっと準備があるしな。

午後七時

「ただいま」

『帰りましたです』

「おかえり。もう準備はできてるぞ」

『す、凄い料理です！』

ああ、初めて見るイリカは驚くかもな。

テーブルの上に並ぶ料理の数々。

まあ、クリスマスっぽいのは七面鳥やケーキだけで、あとは俺の好物のヒラメのムニエルだったり、由梨の好物のハンバーグだった

り、サラダだったりする。

「まあ、クリスマスだし。ちょっと豪華にな」『これをちよつとと言うんですか？ 特にこのケーキ、手が込みまくりです！』

「ケーキは私も驚いたよ。これ、いつもより凄いもん」

二人はケーキを指してわいわい言っている。

「まあ、今日は人数が少ないから、少し頑張ってみたんだ。一人二切れしかないけどな」

「いやー、これはとんでもないクオリティです。将来パティシエにでもなるつもりですか？」

「響弥の昔の夢が、まさにそれなんだよ？」

「ああ。昔から、甘いものが好きだったからな。それより、早く食べようぜ？」

「「はーい！」」

午後8時

「ごちそうさま！ 美味しかった」

「ごちそうさまですー。もうお腹一杯ですよー」

「喜んで貰えて嬉しいよ」

料理は一時間で無くなった。やっぱり、自分の料理を食べて笑顔になってくれるのはいいな。

「あ。ねえ響弥さん、ちょっと待っててくださいです！」

「え〜……。ほんとにやるの？」

「もう。諦めてくださいです。それでは、ちょっと失礼です〜」

「ふえ〜」

むう。一体なんなんだ？ 由梨がなんとなく嫌そうにしてたが。

五分後

「お待ちたせです〜！」

そう言って戻ってきたのはイリカだけだった。

「おう。ってあれ？ 由梨は？」

「ふっふ〜ん。それでは、扉オープンです〜！」

イリカが多分念力で寝室の扉を開けた。

「ど……どう、かな？」 扉を開けたら、そこには。

顔を真っ赤にし、ミニスカサンタ服とサンタ帽子を身に纏ってい

る由梨がいたのだった。

「な、なんだ。ただの天使か……」

「て、天使！？／／／」

うん。ヤバイ。

軽口叩いてないと理性がたもてない。

可愛い！ 可愛すぎる！

なんだよ、あの天使！ 俺を萌死させる気かよ！

「喜んで貰えてなによりです。元はといえば、由梨さんが罰ゲーム有りでジャンケンなんかするからなんですよ」

「くうう……。なぜパーを出した、あの時の私い……。／／／」

しかし、可愛いな。

「可愛すぎるぜ、由梨……」

「きよつ、響！？／／／」

あ、口に出てたか。由梨がオーバーヒートした。頭から煙出てる。やれやれ。戻るまで放置だな。

「イリカ。こいつの衣装、戻しといってくれ」

「はいです」

「それとイリカ。これだけは言っとく」

「なんですか？」

「グッジョブ！」

「むふふ。やはり私の目に狂いはなかったのです！」

午後八時

「乾杯」

由梨と並んでソファーに座り、グラスをがち合わせる。

グラスの中身はシャンパン。……とはいかず、シャンメリーだ。雰囲気だけでも味わえればいいから、中身はそう重要じゃない。

因みにイリカは眠いと言って精霊世界に帰って行った。とどのつまり、二人っきりの時間ってやつだ。

「ん、おいしい」

「だな」

由梨は下戸だ。

それも超が付くレベルの。

こういう雰囲気だけで軽く酔っ払えるほどだ。

向かいの席で少し上気して頬を染める由梨は、いつもとは違う色気を放っている。

「こうして二人で過ごすようになって、もう四年かあ。いろいろあったよねえ」「……ああ。あったな、いろいろと」

由梨の言葉で思い出す。

平凡でも楽しかった元の世界の高校生活。

この世界に来てからの学園生活。

そして、四年前のあの日。

「響弥、怖い顔しないで？　楽しくいこうよ。ね？」

由梨の言葉で我に我に返る。

目の前にあるのは、俺の顔を覗き込むような、大切な人の笑顔。

これだ。この笑顔だ。

この笑顔の為なら、俺は命だって賭けてやれる。

お前が望むなら、ヒーローだろうが悪魔だろうが、なんにだってなってる。

「ああ。ありがとな、由梨」

俺はつい由梨の頭を撫でてしまった。小さな頃からの癖って、なかなか抜けないもんだな。

「へ？　私、なにかしたっけ？」

由梨は不思議そうに見つめる。

「いつもありがとなって意味だよ」



頭を撫でながら意味を話し、俺は窓から見える風景を楽しむ。

不意に、頬に柔らかく、あたたかいものが触れた。

由梨が顔を赤らめ、唇に指を当てているのを見て、それが何だったのかはわかった。

「えへへ。いつもありがと、響弥。大好きだよ！」

そう言い、由梨は俺に抱きついた。

その時の由梨の笑顔は、俺は一生忘れないだろうな。

いつだったか、お前は話してくれたよな。

俺が由梨にとって、なくてはならない存在であるように、俺にとっても、由梨はなくてはならない存在なんだよ。

よろしくな。

愛しの恋人さん。

**冬休み 砂糖と塩？ 砂糖の方が好きですが？（後書き）**

夜奈「おい、作者」

はい、なんでせうか。

夜奈「貴様、あたしに殺されたいのか？ それはあたしを馬鹿にしていると見ていいんだな？」

いったい何のことでせう？ 見当がつきま

夜奈「黙れ下郎。今回の文字の羅列はなんだ？ 原作イベントを飛ばすわ、変な話を入れるわ。それでいてあたしの出番が無いとはどういうことだ？」

もう文ですらないと！？ しかも出番が欲しいからですか？

夜奈「な・に・よ・り！ なぜあんなにイチャラブしているんだあいつらは！」

……ああ、あの二人の関係のことですか。

あの二人の関係自体は、本編開始の前から付き合っている設定なんです。

自分で言うのもあれですが、あの二人には相当な過去がありますから。

夜奈「そうなのか？」

ええ。いずれ、本編に絡める感じで過去編なんかも書いて行きた

いんです。

まあ、書きたい所、言ってしまえば原作崩壊に近い感じになりますが、目星は付いていまして。

夜奈「……今、お前を初めて作者と思った」

酷い！ 妹にも言われたことないのに！

夜奈「フン。今までボロボロだったからだ。それでは、また次回だ」

勝手にシメないで！

**爽やかすぎてもいいことはない(前書き)**

今回はあの部長の回です。  
それではどうぞ。

爽やかすぎてもいいことはない

はい、どーも。赤崎響弥です。

冬休みを堪能し、アカデミアに戻って来た俺と由梨は、今日も元気に学園生活を満喫している。

放課後になって、由梨と共にドロップンでも買いに行こうとしていると、スポーツドリンクとタオルを持った明日香を発見した。

はて、今日は何かのイベントの日だったろうか。

まあいいや。声かけてみればわかる。

「お、明日香。どこ行くんだった？」

「あら、響弥に由梨。テニス部でしごかれている十代に、差し入れでもって思ってた」

「あゝ。そういえば十代、クロノス教諭にボールぶつけて今日だけテニス部に入れられたんだっけ」

正しくは十代じゃなくて修造もどきがぶつけたんだけどな。十代にはドンマイとしか言えなかったよ。

体育で思い出したが、この世界の人間の運動神経はおかしい。

なんでGXの世界でテニプリを見なきゃならなかったのだろうか。

「響弥、十代の応援に行かない？」

由梨のイベントリーダーにも反応があったようだ。

なら、行って損は無いだろうな。

「んゝ。そうだな。行ってみるか」

俺達は十代の応援に向かった。

テニスコートが見える場所に来た。

十代はヘロヘロになりながらも、必死にボールに食らいついていた。

十代は何か運動部に入るべきだと思う。

「おー、いたいた。あの十代がへばってるぜ」

「よっぽどしごかれたのね」

「苦勞するね、十代」

俺達は休憩をしていた十代に近づく。

十代の近くには翔もいた。

「オッス、十代」

「差し入れに来たわよ」

「おお！ 響弥に明日香に由梨！ ありがとな！」

十代は明日香の渡したスポーツドリンクをがぶ飲みする。  
よっぽど過酷な練習だったんだろうな。

「おお！ なんて美しい女性なんだ！ 君こそ僕のフィアンセに相応しい！」

ん？　なんかムカつく声が聞こえたな。

「君、名前はなんていうんだい？」

「え、えっと、鹿野川由梨ですけど……」

「鹿野川君！　僕と結婚を前提としてお付ごはあっ！」

ちよつと離れた所で由梨が絡まれてたので念力で近づいてとりあえず鉄拳制裁。

「由梨、大丈夫か？　変なこととかされてないか？」

「う、うん。大丈夫だけど」

「き、君！　いきなり殴るなんてどうかしてるよ！　大体君は、鹿野川君のなんなんだ！？」

俺の右ストレートを食らって吹っ飛ばされた修造もどきがやいやいと喚いてやがる。ムカつく野郎だ。

「俺か？　俺は由梨と付き合っている一年の赤崎響弥だ。勿論、付き合うからには結婚も視野に入れてるんだが。何か用か？」

「オシリスレッドの君が鹿野川君の恋人なんて、不釣り合いだ！　僕とデュエルしろ！　僕が勝ったら、鹿野川君には金輪際近づかないで貰おう！」

ほう……？　この俺に由梨絡みで喧嘩を売るとはな。

「……いいだろう。そのデュエル、受けてやる。ただし、テメエが負けた場合、今後由梨に一度でも言葉をかけた瞬間、比喻抜きで八つ裂きだ」

「いいだろう！　僕が負ける訳ないからね！」

俺はサイドデッキのカードを3枚デッキに加える。

こいつには一度、絶望を与えなきゃならんだろうからな。

「「デュエル！」」

響弥

LP／4000

手札／5

綾小路

LP／4000

手札／5

side.. 由梨

えっと、いろいろあって、響弥が修造もどきとデュエルすることになった。

あそこまで響弥が怒るのは、久しぶりに見たな。それほど、私のことを大切にしてくれてるんだよね。

「ねえ由梨。貴方響弥と付き合ってたの？」



明日香が話しかけてきた。そういえば、私達が付き合ってることは言ってなかったっけ。

「うん。四年前の誕生日に告白されて、お付き合いすることになったんだ」

「良かったじゃない。なら、響弥には勝って貰わないといけないわね」

「うん。響弥は絶対勝つよ！」

「僕の」

「俺のターン！俺はカードを4枚伏せる。《サイコワールド》を召喚！ターンエンドだ」

響弥

LP／4000

手札／1

うはあ……。響弥、凄い怒ってる。

「ぼ、僕のターン！僕は魔法カード《サービスエース》を発動するよ！このカードは僕が手札から選んだカードを君が当てる。魔法・罠・モンスターから選択し、当たれば効果は無効。だけど、外した場合は1500ポイントのダメージを受けてもらうよ。さあ、カードの種類を選ぶんだ！」

「モンスター」

「ほ、本当にモンスターで良いのかい？　今ならまだ言い直せるよ？」

「何度も言わせるな。モンスターを宣言する」

「くっ……。選択したのはモンスターカードの《メガ・サンダーボール》。ダメージは発生しない。発動後、選択したカードは除外される……」

いや、あれだけ動揺してればわかるよね。ギャンブルはポーカーフェイスが大事なのに。

「僕はカードを1枚伏せて、ターンエンドだよ」

綾小路

LP／4000

手札／3

場ががら空き……。何か攻撃反応型トラップでも伏せてるのかな？

「俺のターン、ドロー！　《メンタルマスター》を召喚！」

メンタルマスター

星1／光属性／サイキック族／攻100／守200

おお、メンマス。

元の世界だと禁止になったんだよね。響弥が凄く落ち込んでたなあ。

ちなみに、こっちの世界だと準制限だったよ。

「さらに、『命削りの宝札』を発動！ 手札が5枚になるようにカードをドロ―する！ そして、5ターン後に手札を全て捨てる！ 今の手札は0！ よって、カードを5枚ドロ―する！」

デメリットないよね、命削りの宝札って。

OCGにならなくて良かった。天よりの宝札（笑）みたいな悲劇が起こらなくてほんとに良かった。

「速攻魔法《緊急レポート》を発動！ デッキまたは手札から、レベル3以下のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する！ 《メンタルプロテクター》を特殊召喚！ さらに、『念導増幅装置』を発動！ メンタルマスターに装備する。さらに、メンタルマスターに効果発動！ 800ポイントのライフを払い、サイキック族モンスター1体を生贄に捧げることで、デッキからレベル4以下のサイキック族モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！ だが念導増幅装置の効果で、ライフコストは無い！ 俺はメンタルプロテクターを生贄に、デッキから《ジェネティク・ウーマン》を特殊召喚！」

ジェネティク・ウーマン

星4／風属性／サイキック族／攻1700／守1200

「さあ、ショータイムだ！ レベル4のジェネティク・ウーマンと、レベル4のサイコ・ワールドに、レベル1のメンタルマスターをチューニング！」

超常なる力を持つ者よ。あらゆる厚き壁を、狂わぬ狙いで全て貫け！ シンクロ召喚！ 現れろ《ハイパーサイコガンナー》！」

ハイパーサイコガンナー

星9／地属性／サイキック族／攻3000／守2500

おお、ハイパーサイコガンナー。

やっぱり響弥の引きは凄いね。

この前、原作キャラはチートドロが多すぎるなんて言ってたけど、私からすれば響弥も立派なチートドロ持ちだよ。

まあ、頼もしいから良いんだけどね？

「さあ、バトルだ！ 奴を撃ち抜け、ハイパーサイコガンナー！  
バースト・サイコ・ブラスター！」

「ふふ、かかったね！ <sup>レシーフエース</sup>トラップ発動！ このカードは相手の直接攻撃を無効にし、更に1500ポイントのダメージを与えるカード。ただし、コストとしてデッキトップから3枚墓地に送る。残念だけど、君の攻撃は打ち返させてもらおうよ！」

やっぱり攻撃反応型か。

でも、響弥がなんの対策もしてないとは思えないな。

「甘えなあ！ 手札から《ライフ・コーディネーター》の効果発動！ 相手がライフポイントにダメージを与える効果を持つカードを発動した時、手札のこのカードを墓地に捨てることで、そのカードの発動を無効にし、破壊する！」

「そ、そんな！ ぐあああ！」

綾小路

LP／4000↓1000

「くっ……。でもまだ、僕のライフは残っているよ！」

死亡フラグいただきました。

こういうこと言うと、大抵追撃されて負けるんだよね。

「甘いんだよお前は！ ホワイトチョコのプールぐらいな！ トラップ発動！<sup>バスター・モード</sup> シンクロモンスター1体を生贄に捧げること、生贄に捧げたシンクロモンスターの名前が含まれた『バスター』と名のつくモンスター1体をデッキから特殊召喚する！ ハイパーサイコガンナーよ。新たな装甲を纏い、再び戦場に現れる！ 《ハイパーサイコガンナー／バスター》！」

ハイパーサイコガンナー／バスター

星11／地属性／サイキック族／攻3500／守3000

「攻撃力3500ですって!？」

「あのブルーアイズよりも上ッス！」

明日香や翔くんが驚いてる。ブルーアイズって攻撃力の基準なんだね。3000は偉大。

「サイコガンナー／バスターで攻撃！ ぶち抜け！ ハイパー・サイコ・バスター！」

「うわああああ！」

綾小路

LP／1000↓0

お見事、だね。

やっぱり響弥はかっこいいなあ。

「これで終いだ。身の程を弁えろ、凡骨が」

「ぼ、僕が負けるなんて……嘘だあああ！」

綾小路……だったっけ？　が泣きながら去っていく。  
あんな姿、ファンの女の子は幻滅するだろうなあ。

「おつかれ、響弥。ライフ無傷だったね」

「フン。こんなもの、勝利の内に入らん」

響弥がかなり冷めてる。他のみんなは驚いてるね。響弥はどちらかといえば熱いタイプだし。

「凄いデュエルだったぜ、響弥！　まさかシンクロモンスターが進化するなんてな！　なあ、そのデッキでデュエルしてくれよ！」

あ、十代は相変わらずだね。  
後ろのユベルも呆れてるよ。

「勘弁だ。このバランスが崩壊したデッキじゃ、お前に勝てる気がしない」

響弥はデッキのカードを調整しながら言う。

確かに、／バスター特化って訳じゃないもんね。

というか、普段のデッキを回せることが私には不思議でならないよ……。

「そういえば、あいつの言ってたフィアンセって、どういう意味だ

「？」

十代の発言に、周りが凍りついた。

ユベルが居るから、少しは鈍感さが治ってると思ったんだけどなあ。

「十代、お前はもう少し一般常識を学んでこい。つか授業中寝んな」

「アニキ、さすがにそれはないッス……」

「はあ。やっぱり十代は十代ね」

みんなから言われたい放題の十代。

いや、さすがにフィアンセくらい知っとうよ。

「なあ、教えてくれよう！ フィアンセってなんなんだよう！」

夕焼けに染まるテニスコートには、十代の叫びが木霊したそうなの……

爽やかすぎてもいいことはない（後書き）

夜奈「さて、またあたしは出番がなかった訳だが」

もしかして、怒っちゃってます？

夜奈「ああ。もしかしくても怒っちゃってる」

すみません。あんまり絡める話じゃなかったんで。

夜奈「この際だから聞きたいんだが、あたしはこういうポジションなんだ？ あたし自身は響弥のライバルポジだと思っていたんだが」

主人公のライバルで合ってます。

そんなにあせらなくても、セブンスター編が始まれば、活躍の場は増えますよ。

夜奈「本当だろうな？」

まあ、セブンスター編からどんどんオリジナル要素を入れて行くこうと思ってるんで。

オリジナルキャラである夜奈さんの出番という訳ですよ。

夜奈「……把握した。今日はこの辺りでお別れだな」

誤字や間違い、感想などが有りましたら、感想スペースへお願いします。

それでは皆様、またお会いしましょう。



**俺の特殊効果発動！（前書き）**

PV20000アクセス、突破しました！  
ありがとうございます！  
それでは本編をどうぞ。

## 俺の特殊効果発動！

体調管理は大事。マジ大事。

どうも、赤崎響弥だ。

前回から結構時間が飛んでるから、順を追って説明しよう。

まずは早乙女レイ襲撃事件について。

レイは原作通りにレッド寮に来たが、部屋が空いてないとかで何故か俺の部屋に来やがった。

どうにもあの娘は苦手なので、十代に任せて逃亡した。

つか、カイザーと仲がいい訳でもなかったし、俺は力になれそうにはなかったからな。

お次は、ノース校との友好デュエル。

ノース校との友好デュエルは、原作とは違い一年生の中から二人が選ばれることになっていた。

その内一人は十代。なんでも相手方から指名があったらしい。

そして、もう一人。

本来ならもう一人は、成績優秀者枠とかなんとかで、俺が出る予定だった。

だが。

なんという神様の悪戯か。俺は当日二日前からかなり酷い風邪を引いてしまったのだ。

仕方が無いため、急遽友好デュエルは代表一人が戦うことになったのだ。

その後は原作通りに、十代とノース校の代表である万丈目がデュエルして十代が勝利。

その後、万丈目は本校に残ることになった。これも原作通りだ。

そして、ついさっきの、セブンスターズについての説明。

未だに良くならない風邪を患いながら、校長室で話を聞いた。

俺、今日の朝に熱計ったら39度だったんだよ？

なのに校長室に呼ばれたんだ。わけがわからないよ。

で、校長室で大徳寺先生に七星門の鍵を託されたのだった。

「はあつくしよい！ あー、かなりまずいよこれは。やっぱ馬鹿だろあの校長……」

「あーもう、喋らなくていいから。黙って安静にしてなさい」

現在俺は保健室で由梨の看病を受けている。

いやー、いい彼女を持ったよね。由梨は俺の嫁。

「はい、あーん」

目の前にスプーンが差し出された。

お粥だ。

由梨が俺の為に作って来てくれたらしい。

「あーん」

俺は何の抵抗も無しに口を開け、お粥を食べる。

昔、今と同じような状況で口を開けるのを拒んだら、腹に強烈なのを食らったからな。あれはトラウマもんだよ。

「よしよし。しっかり食べて、早く良くなってね。セブンスターズの戦いもあるんだし」

まるで母親のような笑みを、由梨は浮かべる。

見ていると安心する笑顔だな。いつまでも見ていたくなるような。

「悪い、由梨。ちょっと寝てもいいか？」

「いいよ。ゆっくり休んで、明日に備えようね」

由梨が俺の頭を撫でた。

いつもと逆な状況だ。

「……悪くないな」

そう呟いた後、俺の意識は遠のいていった。

目が覚めた。

やけに暑い。

足元を確認してみると、薄い光の床の下に赤いドロドロした物体が見えた。

なるほど。ここは火山の火口の真上か。なら、ここに来やがる

野郎も想像がつく。

「我が名はダークネス、セブンスターズの一人」

自重し過ぎな吹雪さんこと、ダークネス吹雪。

正直、この事態は想像がついていた

。セブンスターズの狙いは七星門の鍵。それを持っている奴なら、誰でも呼ばれる可能性があっただろうからな。

「セブンスターズ、ねえ。狙いは七星門の鍵だろう？」

俺の言葉を聞いて、ニヤリと笑うダークネス。

「話が早いな……。なら、負ければ鍵だけでなく、あそこにいる女の命も奪われることも、わかっているのだろう？」

ダークネスは少し離れた火口の中央を指差した。

そこには、光の膜に包まれた由梨がいた。

「響弥！」

「安心しろ、由梨。少し休んだお陰で、体は動く。すぐに助けてやるさ」

不安そうな顔をする由梨を安心させようと、言葉をかける。

『イリカ。由梨の側に行ってくれ。俺にもしものがあれば、頼む』

『マ、マスター？』

『由梨にはああ言ったが、正直体が保つかわからん。だから、備えておいてくれ』

そう言われたイリカは、少し怒りながらも由梨の側へと向かった。

「早く構えろ。あの女の膜が溶けてしまうぞ。それとも、命乞いでも」

「ごちゃごちゃうるせえ」

「なに？」

「ごちゃごちゃうるせえって言ってんだ。由梨を人質にした時点で、お前は無事に帰れやしねえよ」

とりあえず、今は目の前の敵を潰す。由梨を人質にした罪を、その身で贖わせてやらなきゃな。

「「デュエル！」」

響弥

LP／4000

手札／5

ダークネス

LP／4000

手札／5

先攻 ダークネス

「俺のターン、ドロー！ 《黒竜の雛》を召喚！ さらに、黒竜の雛の効果発動！ このモンスターを墓地へ送り、手札の《真紅眼のレッドアイズ・ブラックドラゴン 黒竜》を特殊召喚する！ 現れろ、レッドアイズ！」

黒竜の雛

星1／闇属性／ドラゴン族／攻800／守500

真紅眼の黒竜  
レッドアイズ・ブラックドラゴン

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

まずはレッドアイズか。出て来るのは当たり前だろうな。

「さらに魔法カード《黒炎弾》を発動！ 貴様にレッドアイズの元々の攻撃力分のダメージを与える！ やれ、レッドアイズ！ 黒炎弾！」

俺に向かって黒く燃える炎が吐き出される。

俺の手札には、発動を防ぐカードは無い。食らうしかないな。

「響弥！」

『響弥さん！』

おいおい、由梨もイリカも、何を心配してるんだ？

恐らく、闇のゲームの力によるリアルダメージを心配してるんだろうな。

確かに、2400なんてダメージを受ければ、ひとたまりもないかもしれない。

そんなことを考えている間に、黒炎弾はすぐ側にまで来ていた。

俺は右手を前に突き出す。

すると、俺に当たる直前で、黒炎は消滅した。

「なっ……黒炎弾が、当たる前に消滅したと！？」

「安心しろ。ライフはちゃんと減ってるからよ」

響弥

LP／4000↓1600

「俺は少し特別でね。力を使えば、闇のゲームで発生する相手からのダメージは打ち消せる。たとえとどめの一撃だろうと、な」

これがある限り、《外部からのダメージ》は俺には効かない。

「くっ、ターンエンドだ！」

ダークネス

LP／4000

手札／3

「まあ、素早く終わらせようか。ドロー！ これはセブンスターズの特別デッキだ、心して見ておけよ！ 魔法カード《苦渋の選択》を発動！ さあ、この中から好きなカードを選びな」

- ・ガスタの希望 カムイ
- ・ガスタの賢者 ウィンダール
- ・ガスタの疾風 リーズ
- ・ガスタの巫女 ウィンダ
- ・ガスタの静寂 カーム

「フン。《ガスタの静寂 カーム》を手札に加えろ」



良い判断だったな。まあ、結局変わらないんだけどね。

「サンキュー、ダークネス。他のカードは墓地に送るぜ。俺は、《ガスタの静寂 カーム》を召喚！」

ガスタの静寂 カーム

星4／風属性／サイキック族／攻1700／守1100

俺の今回のセブンスターズとのデュエルで使用するの、ガスタと元のサイキックの混合デッキだ。

ガスタと言っても、入っているのは人間型のガスタだけだ。

まあ、サイキック族のサポートが共有できる点と、強力なガスタのシンクロを使えるくらいが利点だな。

『あ、カームさん！』

イリカはこいつの知り合いなのか？ 精霊世界でのこともいつか

聞くとしよう。

「カームの効果発動！ 1ターンに1度、墓地の『ガスタ』と名のつくモンスター2体をデッキに戻すことで、カードを1枚ドロースる。カムイとウィンダをデッキに戻し、カードをドロース！」

よし、最高のドロースだ。

あとは、奴を早く倒さなければ……！

「魔法カード《死者蘇生》を発動！ 墓地のリリースを特殊召喚する！」

ガスタの疾風 リーズ

星5／風属性／サイキック族／攻1900／守1400

「さらに、速攻魔法《緊急レポート》を発動！ デッキから《メンタルマスター》を特殊召喚！」

メンタルマスター

星1／光属性／サイキック族／攻100／守200

「行くぞ！ レベル4のカームに、レベル1のメンタルマスターをチューニング！」

風に乗れ、大鳥よ！ 自然を愛する巫女を乗せ、大切なものを守る力を発揮せよ！

シンクロ召喚！ 舞い降りよ、《ダイガスタ・ガルドス》！」

ダイガスタ・ガルドス

星5／風属性／サイキック族／攻2200／守800

「ダイガスタ・ガルドスの効果発動！ 1ターンに1度、基地の『ガスタ』を2体デッキに戻すことで、相手フィールドの表側表示モンスター1体を破壊する！ 墓地のウィンダールとムストをデッキに戻す！ さあ、レッドアイズを吹き飛ばせ。ダイガスタ・ガルドス！」

「くっ、小癪な！」

「バトルだ！ 行け、ガルドス！ リーズ！」

「ぐああああ！」

ダークネス

LP／4000↓1800↓100

後攻ワンターンキル。

やってて楽しいことじゃ無いが、命がけだし、仕方ないだろう。  
由梨を念力で地面に届けてっと。これで由梨は助けることができた。

あはは。こんな所で燃料切れか？ 病み上がりにはキツかったなあ。

俺の意識は、闇へと飲み込まれていった。  
イリカ、後は頼んだ、ぜ……

## 俺の特殊効果発動！（後書き）

イリカ「響弥さん、どうなっちゃうんでしょう……」

なんとかするのがあなたでしょう？

イリカ「そうですけど……」

そういえば、イリカさんって響弥さんと由梨さんがイチャイチャしてる時はどうしてるんですか？

イリカ「あー、あのイチャイチャモードの時は、精霊世界のサイキック研究所に帰ってるんです。書かれてないだけで砂糖吐きそうなくらいイチャついてる時も沢山ありますから」

なるほど。だとすれば、由梨さんには今回の出来事は堪えるでしょうね。

イリカ「え、それどういう」

おっと、今回はこの辺りで失礼します。

感想や間違いの指摘等がありましたら、感想欄にどうぞ。

それでは、またお会いしましょう。

## 超展開よ、こんにちは（前書き）

タイトル通り、超展開です。そしてデュエル無しです。  
それではどうぞ。

## 超展開よ、こんにちは

はいどうも、赤崎響弥です。

只今俺と由梨は、精霊世界にあるサイキック族の研究所に来て  
いる。

と、言うのも。

ダークネスとの戦いの後、俺が立っていた光の床がそのまま消  
えてしまったそうだ。

そこでイリカが、俺や由梨を精霊世界にワープさせたいらしい。

あ、ダークネスは保健室あたりにワープさせたいのでご心配  
なく。

で、目覚めたら精霊世界のサイキック族の研究所でした、と。

イリカが言うには、この世界に俺達を連れて来た理由は二つ。

一つは俺をサイキックの力に耐えられるように治療すること。

そしてもう一つは、俺や由梨に仲間を紹介すること。らしい。

「という訳で、この方が私のマスターである赤崎響弥さん。そして  
私のもう一人のマスターである鹿野川由梨さんです」

そして現在、サイキック族の方々に紹介されている訳だ。

「おお！ あなたが響弥様でしたか！ 私の名はカバリスト。いつ  
もあの小娘がお世話になっております」

カバリストに握手をされる。その後ろにはクレボンスやサイコ・  
コマンダー、マジカルアンドロイドやサイコ・ヘルストランサーが

居る。

カバリスト、なんか胡散臭い感じがするのは、顔の所為だろうな。

「いやいや。俺の方こそ、いつもみんなには世話になってるよ。それにしても、目の前にいつも見てたモンスターが居るって、なんか不思議な感覚だな」

「ヒヒ！ ダンナのデュエルの腕はピカイチだからネ。オレたちも強いマスターを持てて良かったヨ」

クレボンス、いいキャラしてるじゃないか。嫌いじゃないな。

「こら、クレボンス！ マスターに向かってなんて口の効き方ですか！」

サイコ・ヘルストランサーがクレボンスを叱ってる。なるほど、真面目なタイプなんだね。

「いいよ、ヘルストランサー。俺、堅苦しいのは嫌いだからさ」

「さっすがダンナ！ 彼女持ちなだけあって、心が広いネ」

由梨は関係ないとおもうぞ、クレボンス。

「貴女が由梨様ですね。いつも主が世話になっております」

「あはは、そんな世話なんてしてないよ」

由梨はマジカルアンドロイドと話してる。なんだか威厳がある喋り方だな。

「それで……主とはどこまでいかれたのですか？」

「ああ、それはねえ」

オイ！ この小説18禁じゃねえんだぞ！ 場所変えねえと載せられないような内容話してんじゃねえ！

確かに色々やっちゃったよ！ 俺の荒ぶる魂を抑えられなかった時もあるよ！ でも赤くなりながら嬉しそうに話さないでくれ由梨！

「あの、博士。そろそろ例のものを」

「おお、そうだったな。それでは響弥様に由梨様、私と共に来てくだされ」

「お、おう！ ほら由梨、早く行くぞ！」

「ふえ？ ち、ちよつと響弥！」

カバリストの助け舟を借りて、危ない空間を作っていた由梨を引き連れて、研究所の奥に入った。

カバリストに案内された研究所内部は、まさに脳開発研究所だった。怪しい臭いがプンプンするな。

「そういえば、イリカは俺に協力してほしいことがあるって言って



たんだが、それってなんなんだ？」

「これまであの娘、イリカが与えた力をあそこまで使いこなした者はおりませんでう。響弥様ならば、あの技術を完成させられると」

カバリストは確信を秘めたような言い方をしている。  
俺が技術を完成？　　どういう意味だっの。

「これでございます。この装置を完成に導いて貰いたくて、我らが主をお呼びしたのです」

カバリストは、一つの装置と三つの培養液で満たされた巨大なビーカーの前で止まる。

三つのビーカーの中には、それぞれ青年、女性、老人が入っていた。

しかし、この三人を見たときの既視感は何んだ？

考えても仕方がないか。まずはこの機械について聞いてみるか。

「これは一体なんだ？」

「これは時を操る為の装置でございます。そして、この三人は我々が持つ技術の全てを注ぎ込み、時を超える素養を得た者達でございます」 「時を操る！？」

カバリストの言葉に、由梨は声を上げて驚いている。  
俺も驚いた。まさか時を操る技術なんかあるとは思わなかったしな。

「この装置を完成させるには、もう一人、時を操る素養を持つ物が  
必要なのでございます。ですが、その者はまだ幼く、十分な素養を  
得るには至らなんだ」

カバリストは一息ついて、俺達の後ろに居るイリカを指差した。

「それが、あなた方と共に過ごしていたサイ・ガール、イリカでござ  
います」

イリカは眠っていたところに名前を呼ばれて驚いたのか、ビクン  
となって起きた。

「イリカちゃんが、時を操る……」

「想像できんな」

「ちょっとお！ それは聞き捨てならないです！」

イリカがポカポカと頭を叩いてくるが、そう痛くない。むしろ微  
笑ましい光景だよ。

「んで、なんで俺が時を操る技術を完成させる手助けになるんだ？  
俺は人間だ。しかも、元々現実世界に居た人間だぜ？」

とりあえず話を戻しておこうと思い、俺は気になったことを聞い  
た。

「ふむ……。それを説明するには、まず、精霊についての話をせね  
ばなりますまい」

カバリストは、俺の方へ向き直った。

「まず、精霊が人間界に行く原理から説明致しましょうか。そもそも精霊は、全てのカードに宿っております。その精霊が人間界に出るには、宿る者の波長と、カードを持つ者の波長が合うことが必須条件でございます」

「波長？」

聞き慣れない単語に、俺と由梨は声を揃えて疑問を訴えた。

「簡単に言えば、相性でございます。波長が合う者同士が出会った時、精霊は人間界を行き来する力を得るのでございます」

「つまり、響弥さんと私は相性抜群ってことです！」

カバリストが言った後、イリカがえへんと言わんばかりに胸を張る。

「波長が合うと精霊が人間界に来れるのは分かった。なら、その波長が合った俺が、どうして技術を完成させる力を持つんだ？」

俺が聞くと、カバリストはフフフと笑う。何かおかしかったか？

「あなた方のお知り合いに、モンスターと一体化することができるお方はおりませんか？」

モンスターと一体化する？

そんな奴、居るわけ……。

いや、居た。

あのヤンデレ精霊を連れたデュエル馬鹿。

「遊城十代！」

「さよう。人と精霊、双方の波長が完全に一致した場合、一体となる事が可能なでございます」

なるほど。十代はユベルと波長が完全に一致しているから、超融合無しで一体化できる訳か。

でも、なんで俺にその事を話したんだ？

「も、もしかして響弥とイリカちゃんも、波長が完全に一致してるの!?!」

由梨が何かに気づいたように言った。

そして、カバリストはゆっくりと頷いた。

「さよう。響弥様とイリカ。この二人の波長は、寸分の狂いもなく一致しているのでございます」

マジかよ。

だとすると、俺もイリカと一体化できることになる。

「さらに、これはもはや奇跡としか言いようが無いのですが。響弥様は生まれつき、時を操る素養を持っていちゃいます。それも、この三人の素養を遥かに凌ぐほどのそれをお持ちだ」

「俺が時を操る素養を？」

おいおい、一応俺は平凡な人間であることをウリにしていた人間だぜ？

「ですが、響弥様は人間。時を操る素養を持つとも、人間には扱える物では無い」

「その素養を生かすための一体化、ということなのです。私と一体化して人という枠を超えた存在になれば、その素養を充分に活用できる。という訳なのです」

カバリストとイリカが続けて話す。

色々言われて、もう脳がオーバーヒートしそうなんだが。

隣の由梨はもう頭から煙吹いてるし。

「要するに、私と響弥さんの一体化が実現すれば、時を操る技術は完成し、響弥さんも新しい力を手に入れることになるのです」

「新しい力だと？」

煙を吹いてる由梨の頭を貰った氷嚢で冷やしながら、俺はイリカの話聞く。

「はいです。恐らく時間掌握、時間を止めたり、時間を戻したりができるようになるはずです」

「時間掌握……」

時を止め、時を戻す。

そんなことが可能なんて、まるで漫画やアニメの世界だ。あ、ここアニメの世界だったな。

「この技術が完成すれば、私達精霊世界の者でも、あの連中の侵攻も防げるはず。お願いします響弥さん！ 私達に、力を貸してください！」

イリカがぺこりと頭を下げた。それに合わせてカバリストも頭を下げる。

ま、俺の答えは決まってるんだがな。

「頭を上げてくれ、二人とも。協力させて貰うよ」

「ほ、本当ですか！ ありがとうございます！」

イリカは目に涙を浮かべて喜んでいる。カバリストも嬉しそうだ。

「ならば、早速やっていただきましょうか。お二人共目を閉じ、互いの波長を感じてくだされ」

とりあえず、言われた通りに目を閉じる。

すると、頭の中にイリカの様子が浮かんでくる。これが波長を感じることか？

「そうそう、その調子でございます。お次は、浮かんでいる相手の姿を強く思ってください」

相手のことを強く思う、か。

そういや、俺がここに居るのも、イリカに出逢ったからなんだよな。

イリカも大切な仲間だ。俺が絶対に守って、精霊世界やパラレルワールドも救ってやる！

「今です、響弥さん！」

イリカの声が聞こえた瞬間、何をすればいいのかが頭の中に浮かんできた。

イリカと一つとなる方法。

俺とイリカだからできる方法。      シンクロ……召喚！

「ああ、行くぜイリカ！ 俺は、俺自身にイリカをチューニング！」

イリカが二つの緑色の輪となって、俺を包み込む。  
体の内側から力が溢れる。

一人では、とても制御できそうにないほどの力。

すると、俺はイリカの力で半透明になった。

イリカのおかげで、力が制御でき、感じる事ができた。

これが、奇跡を起こす力！

「二つの魂よ！ 一つに繋がり、時を操る力を持って、ここから奇跡の軌跡を描け！」

ソウル・シンクロ！」

辺りを緑色の光が包む。眩しくて目を開けてられないな。

光が消え、目を開けると、由梨が口を開けて驚いていた。

「こ、これが、響弥とイリカちゃんが一つになった姿……。か、か、

か……」

か？

「可愛いー！ めちゃくちゃ可愛いよ響弥！」

はあ？ 俺が可愛い？

「おいおい待ってく……れ……」

俺は自分自身の発した声に驚いた。

自分で言うのもなんだが、俺は結構かっこいい少し低めの声だったはず。

なのに、今さっき俺の口から出たそれは、まるで女の子のような声だった。

俺は恐る恐る聞いてみる。

「なあ、カバリスト。姿見ってこの研究所にあるか？」

「それならば……これでいかがですか？」

カバリストが出してくれた姿見を見て、俺は驚愕した。

そこに居たのは、肩よりも少し下の辺りまで伸ばしたライトブラウンの髪に、髪よりも少し濃い茶色のくりっとした瞳でこちらを見つめる、サイ・ガールが着ている服のクリーム色の部分が水色になった衣装に身を包んだ、可愛い少女だった。

「お、俺の部分がほとんど残ってねえー！」



俺の可愛らしい断末魔が、研究所に木霊した……

## 超展開よ、こんにちは（後書き）

これから忙しくなるので、更新頻度が下がると思います。

まあ、元から不定期更新だったんですけどね。

感想、誤字の指摘等がありましたら、遠慮なくお願いします。

それでは次回も、いつになるか分かりませんがよろしくお願いします。  
ます。

**例外を狩る者（イレギュラー・ハンター）（前書き）**

今回もかなり話が飛んでいます。  
それではどうぞ。

## 例外を狩る者（イレギュラー・ハンター）

アカデミアの廃寮の中で、不敵に笑う二人の人物がいた。

「うん？　この島に居る例外の数、報告よりも少ないですね」  
イレギュラー

緑色の髪をした男は、一枚の紙を見ながら首を傾げた。  
その隣の黄色い髪の少年は奇妙な声で笑う。

「イツヒヤヒヤ！　よけーな邪魔が入んなくていいじゃん。僕からすればだいかんげーだよ」

「一応言っておくんですが。余り派手にやらかさないでくださいね？  
私の力にも限界があるので」

「しょーちしてるよ。イツヒヤヒヤ！」

緑髪の男が黄色髪の少年に注意をするが、少年は聞く気が無いのか笑うだけだった。

「おい、お前達」

二人の後ろから、黒いフードを被った男が歩み寄った。

「おや、これはこれは。貴方が出てこられるとは、何かあったのですか？」

「上からの命令だ。今回の襲撃は、どのような手段を取っても構わん。イレギュラーなんとしてでも、例外を一人消せ」

黒いフードの男は感情を隠さずに言葉を発した。それを聞いた二人もまた、黒い笑顔を浮かべた。

「遠慮はするな、ですか。有り難いですね」

「だがあの男を倒すことは許さん。それを覚えておけ」

「イヒヤヒヤヒヤ！ それにしても、相変わらずしつこい奴だね。アイツがかわいそーに思えてきたよ」

二人の言葉には耳を貸さず、フードの男はその場を後にした。フードの男の頭の中にあるのは、一人の男のことだけだった。

「待っている、赤崎響弥。貴様は必ず、この俺が叩き潰してやる……！」

……。  
響弥達不在のデュエルアカデミアに、新たな脅威が近づいていた

## side 夜奈

最初のセブンスターズである、ダークネスがなぜか保健室の前に倒れていたあの日。あの日以来、由梨や響弥の行方が分からない。島中を探したのだが、二人が見つかることはなかった。

あの二人がやられるなど、そうそうあるはずはない。

あたしは帰って来ると信じているが、他のみんなの心は晴れないようだ。

さらに、もう一つ気がかりなことがある。

目を覚ましたダークネス、いや、天上院吹雪さんから、七星門の鍵を託された。

この鍵は、恐らく響弥が持っていたものだろう。

職務放棄とはいいい度胸だ。あいつが帰ってきたら、思いきり投げつけてやろうじゃないか。

その後、セブンスターズとの戦いは、十代や万丈目がメインになって進んでいった。

吸血鬼やアマゾネス、盗賊や古代の王。こうしてみると、結構ユニークな奴らだな。

それからしばらくの間、セブンスターズとの戦いはなかった。後二人居たはずなんだが、その内一人の見当がつかない。

一人は響弥や由梨が、大徳寺先生だと言っていた。強く口止めされているので、十代達に話したりはしない。

問題は後一人。

本来、原作と響弥達と呼んでいるものでは、タイタンという男が六人目のセブンスターズだったらしい。

だが、そのタイタンは私が風邪を引いていた内に乗り込んでいた廃寮で救出されているらしい。

だから、その枠に誰が入ってくるのかが分からないから、油断はできない。

今はセブンスターズとのデュエルの為に、デッキの調整でもしておくか。

「……そういえば、由梨から面白いカードを貰っていたな」

デッキケースの空いているスペースに入れていた、二枚のカードを取り出す。

「《ダーク・ジェノサイド・カッター》に、《闇の閃光》。どちらもあたしのデッキに合うカードだな」

二枚のカードをデッキに入れながら、由梨の顔を思い出す。

彼女と話すようになって久しいが、未だに彼女のことはよくわからない。

明るくて、ふわふわしている感じ。掴みどころがあるような、ないような。

でも、その笑顔は見る者を優しく包み込んでくれるような暖かさが……

……何を考えているんだ、あたしは。

きっと最近の寝不足が原因なのだろう。今日はゆっくり眠るとするか。

「……誰か居るのか？」

不意に人の気配を感じた。ここは女子寮の中でも高い階層のはず。ここで気配を感じさせるような奴は、ロクな奴じゃない。

「よく気づきましたね。私はセブンスターズの一人。七星門の鍵と互いの命を賭けて、私とデュエルしましょう」

聞こえてきた声は、物腰の柔らかい感じの男の声。

相手はセブンスターズか。なら、断る理由は無いな。

「いいだろう。なら、場所を変えて貰おうか」

女子寮で闇のデュエルなどやれば、とんでもない被害が出てしまう。

人目に着かない場所に移動しなければ。

「分かりました。確かにそうですね。それでは、移動致しましょう」

男がそう言い、指をパチンと鳴らすと、場所が一瞬で変わってしまった。

「ここは誰も使っていない廃寮です。ここならば、誰にも迷惑はかからないでしょう」

男は初めて姿を現した。

濃い緑色の短髪、黒いコートを羽織り、気味の悪い仮面で顔を覆っている。

「私の名はインジャステイス。さあ、天斗夜奈さん、始めましょうか。闇のゲームをねえ！」

男、インジャステイスがそう言うと、着ているコートの左腕部分がデュエルディスクに変わった。

この光景を見てもあまり驚けない自分はもう末期なのだろうな。あたしはそんなことを考えながら、デュエルディスクを構えた。あたしの胸の部分にある、七星門の鍵。

響弥から託されたこの鍵は、絶対に守り通す！

「デュエル！」



夜奈

LP／4000

手札／5

インジャステイス

LP／4000

手札／5

「レディファーストです。先攻は譲りますよ」

余裕の構えは崩さない、か。

なら、あたしが崩してやるさ！

「なら、お言葉に甘えるところ。あたしのターン！」

闇のゲームは、ダメージが実体化する。

ブラックフェザー

なら、BFの速攻で、一気に勝ちをもぎ取る！

「自分フィールドにカードが存在しないことにより、手札から《BF―逆風のガスト》を特殊召喚する！さらに、自分フィールドに『BF』と名のつくモンスターが存在することにより、手札から《BF―黒槍のブラスト》を特殊召喚！」

BF―逆風のガスト

星2／闇属性／鳥獣族／攻900／守1400

BF―黒槍のブラスト

星4／闇属性／鳥獣族／攻1700／守800

「さらに、《終末の騎士》を守備表示で召喚し、効果を発動！ デッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。あたしは《BF―精鋭のゼピュロス》を墓地へ送る。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

終末の騎士

星4／闇属性／戦士族／攻1400／守1200

夜奈

LP／4000

手札／2

「私のターン、ドロー！ 私は《おろかな埋葬》を発動し、《暗黒界の龍神 グラファ》を墓地へ送る。そして、《暗黒界の雷》を発動！ その伏せカードは破壊しますよ！」

「くっ！」

破壊されたのは《ブラック・ブースト》。今の状況では使えないカードだから、被害は少ない。

だが、問題は……

「暗黒界の雷の効果で、《暗黒界の刺客 カーキ》を墓地へ捨てる。そして、カーキの効果発動！ カードの効果で手札から捨てられた場合、フィールド上のモンスター1体を破壊する！ 黒槍のブラストを破壊！」

「くうっ、ブラスト！」

「さらに私は《暗黒界の狂王 ブロン》を召喚！ そして、自分フ  
ィールドの『暗黒界』と名のつくモンスター1体を手札に戻し、墓  
地の《暗黒界の龍神 グラファ》を特殊召喚！」

暗黒界の狂王 ブロン

星4／闇属性／悪魔族／攻1800／守400

暗黒界の龍神 グラファ

星8／闇属性／悪魔族／攻2700／守1800

「くっ、グラファ……！」

元の世界でも猛威を振るっていた、暗黒界デッキ。  
簡単に上級、最上級のモンスターが出てくる様は、人によっては  
トラウマになるほどだ。

「バトルです。さあグラファ、終末の騎士を攻撃しなさい！」

「くうっ！」

守備表示のモンスターが攻撃されてもこの衝撃とは……。  
ダメージを受けるのはかなりマズいな。

「私はこれでターンエンド。さあ、貴方のターンですよ？」

インジャステイス

LP／4000  
手札／3

「あたしのターン！」

よし、奴の場に伏せカードは無い。攻めるなら今だな。

「あたしはチューナーモンスター、《BF一極北のブリザード》を召喚し、効果発動！ 召喚に成功した時、墓地のレベル4以下の『BF』と名のつくモンスター1体を守備表示で特殊召喚する！ 戻って来い、黒槍のブラスト！」

BF一極北のブリザード

星2／闇属性／鳥獣族・チューナー／攻1300／守0

デュエルディスクをコツコツとつつくブリザード。何度見ても癒されるな。

さて、これで準備は整った！

「魔法カード《ダーク・ジェノサイド・カッター》を発動！ 自分フィールドに闇属性モンスターが三体以上存在する場合、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚をゲームから除外する！ あたしは暗黒界の龍神 グラファを除外！」

「なに！？」

由梨から貰ったカード、ダーク・ジェノサイド・カッター。由梨が共に戦ってくれるような気がするな。

これで奴の場はがら空きだ。一気に攻め込んでやる！

「レベル4、黒槍のブラストと、レベル2、逆風のガストに、レベル2、極北のブリザードをチューニング！

吹き荒べ嵐よ！ 鋼鉄の意志と光の速さを得て、その姿を昇華せよ！  
シンクロ召喚！

切り開け！ 《BF一孤高のシルバー・ウィンド》！」

BF一孤高のシルバー・ウィンド

星8／闇属性／鳥獣族／攻2800／守2000

「バトル！ シルバー・ウィンドでダイレクトアタック！ パーフェクト・ストーム！」

「ぐううあああ！ やってくださいねえ！」

インジャステイス

LP／4000↓1200

先手は打った。後は一気に押し通すだけだ。

「あたしはカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

夜奈

LP／4000

手札／0

「くっ、私のターン！ 私は《暗黒界の狂王 ブロン》を守備表示で召喚。カードを2枚伏せて、ターンエンドです」

「エンドフェイズに、トラップカード《デルタ・クロウーアンチ・

リバーズ』を発動！ 自分フィールドに『B F』と名のつくモンスターが表側表示で存在する場合、相手フィールドにセットされた魔法・トラップカードを全て破壊する！」

「な、なんだと！？ 私のミラーフォースと次元幽閉が！」

インジャステイス

LP／1200

手札／1

これで奴の場には、守備表示のブロンが1体のみ。

次のターン、モンスターをレベル4以下のモンスターをドロークできれば、あたしの勝ちだ！

「イヒヤヒヤヒヤ！ あんなに大見得切っていったくせに、ボコボコにやられちゃってんじゃーん。仕方ないな。僕が手を貸してあげようか」

奇妙な声と共に、暗闇の中から黄色い髪に仮面をつけた背の小さい子供が出て来た。

あの仮面、インジャステイスと同じ……。

「お前は一体何者だ？ そのセブンスターズの仲間か？」

私の問いに、少年はまた笑う。

「イヒヤヒヤ！ そーだね、僕はこのおすましやろーの仲間だ。まー、僕はセブンスターズである以前に、あるしめーを持ってるん

だけどねえ」

「ある使命だど？」

「イヒヤヒヤ！ 僕達イレギュラー・ハンターはあらゆる世界の例外イレギュラーを排除する特殊部隊。例外を狩る者さ！」

「イレギュラー、ハンターだど？」

「そう。まあ、早い話がさー」

少年は血走った目を見開いて、言った。

「君にはここで死んで貰うよ！ イーッヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」  
少年の狂ったような笑い声が、廃寮に木霊した。

**例外を狩る者（イレギュラー・ハンター）（後書き）**

次回は一週間以内には更新します。

それでは皆様、またお会いしましょう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7325y/>

---

遊戯王GX 奇跡の軌跡

2012年1月13日18時57分発行